

猫とその飼い主が幻想 郷に転送です

ほのぼの 獣耳

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ひよんなことから、幻想郷に、飛ばされた

「海猫 桐谷」と、飼い猫の「ミケ」

一体どのような、生活を送って行くのやら、

どうも！新人の ほのぼの 獣耳です！

獣というか、猫が大好きです!!

新人でありながら・・・ガラスのハートの作者です!!

辛口コメントは、控えめお願いします！

皆さんのおかげもあり、読んでくれる人も、

お気に入りしてくれる人も増えました！

ありがとうございます！

まだまだ精進しますのでこれからもよろしくお願いします！

目次

プロローグ	1	番外編その一 かりちゆまとメイドと魔女っ子	39
暗い森にはご用心 キノコにもご用心	5	半人半霊と書いて半人前 亡霊と書いて可愛いもの好き	45
インチキ巫女は、優しいですね	10	半人半霊と書いて半人前 亡霊と書いて可愛い物好き	52
バカとは、仲良くできそうですね	15	八雲家にお邪魔します	57
紅魔館に到着 前編	19	ミケ君がちゃんに 海猫君が……になつた	63
紅魔館到着 後編	24	異変？なのかな？	71
紅魔館にお泊まりします 海猫編	30	ああ、異変なんです	76
紅魔館にお泊まりです ミケ編&メイド	34	突撃!!人形の家!!!	81
さんは怖いものです?	34	番外編!!変態三人集が怖いです!!	

花畑に行こう	93
ミケが：酔った：	99
ミケちゃんが：	103
小悪魔さんと咲夜さんと海猫くん：	つ
いでに妖夢	109
にやー(〓ゝエゝ〓)	115
おかしな事：	120
鬱のオーラ	125
皆で仲良く演奏したいの	129
無意識ならなんでも：	134
寒くなる：：へっくちゆ	139
コラボその1	144

クリスマスパーティーから、あけおめ	153
番外編!!! 作者の遊びです!!	159
EX!!	165
EX?!!	170
思い通りにはならないよ!	177
人遊び	183
作者の遊び!!!	188
今後の予定についてパルスイさんと海猫	195
君、お嬢様、アリスと会話	195
感情は隠すのが難しい人もいるんだよ	199
キョンシー	205

なんか心細い宴会：：

—

213

これが求めてる者ですか？

—

219

戦い？そんなものは忘れた!!!

—

225

プロローグ

「主ー…ここどこですかね」

「こつちが聞きたいよ…はあ」

まさか…こんな事になるなんて思ってもなかった…

その時が来るまでは…

☆月♪日、12時30分 とある家

「今日もお散歩しよつかあー♪」

「にゃー♪」

と、慣れた手つきで猫にリードをつけ、いつも通り、家を出て、いつも通り、公園を通り、いつも通り、交差点で青になるまで待ち、青になって渡っていたら曲がってきたダンプカーに轢かれてしまった…

目覚めるとそこは光に包まれた場所だった…

「あれ…ここは???確か、散歩してて…ダンプカーに、轢かれて、そうだ!!!ミケー!」

「ん、なんですか主」

「ああ、よかつたミケ??？」

「ん……なんですか？主……顔に何か付いてますか？」

「いやいや!!誰!!君、誰!僕は、猫耳生えた子と一緒に死んだはずないけど!!」

「え?ミケですよ?ほら、このリード」

「リードってどこにあるのさ」

「おかしいなあ……主が付けてくれて、そつから」

と、ゴチャゴチャ話していると……

『おー、目覚めたのねえー』

おっさんが目の前から現れた

「あんた誰!!僕は、猫と死んだはずだぞ!!」

『ん?、いかにも、その猫耳生えた男の子がミケだが?』

「そうなのか?…… お前がミケなのか?」

「さつきから言ってるじゃないですか!主!」

「そうなのか?…… まあそれはそうだとして、おっさん誰!」

『お……おっさんとは…… 儂は神さまだぞ!!』

「へえー、でなんで僕らは、こんな所に?」

「ウンウンなんでこんな所にいるの？」

『ん？だって、儂が間違えたから、転生させようかどごめんねえwww』

「ハァー?!」

「なんで!!なんで間違えたの?!」

「そだよー!!なんで間違えたの!!」

『え？、だって、色々在って

神様 少年 猫耳少年 会話中

「で、僕たちは、どこに転生されんですか？」

『ん？、幻想郷だが……』

「げんそうきよー？」

「幻想郷って、あの幻想郷？死亡フラグは、立ちまくりの？」

『そだよー、能力をつけたから』

「「え？いつつけたの？」」

『え、会話してる時に備え付けたよ？』

「そ、そうなんだで、どんな能力なの？」

『海猫君は、(物を操る程度の能力)ミケ君は(物を跳ね返す程度の能力)わかった???、あ、でも弾幕遊びには気を付けてね♪』

「はい」

『さてと、そろそろ休もうかな、あとはスキマのBBAが、ぎゃあ!!!』

いきなり空間が引き裂かれると、自称?神様は、空間の裂け目に飲み込まれた、代わりに、女の人が現れた

《はあ、あのクソジジイ… 説明は受けてるわよね?》

「はい、説明は受けてます、あの、貴女は?」

《私?私はスキマ妖怪よ、さてとグダグタするのも面倒くさいし》

と、いきなり空間が足元から裂け始めた

「きゃあ!!!」

そして飲み込まれた…

そして現在にあたる

暗い森にはご用心 キノコにもご用心

どの位歩いただろうか、村の一つも見つからず、そして、森で迷子

「はあ、疲れたあ」

「主、彼処に川が流れてますよ」

「?!どこ!!」

「彼処ですね」

「ミケ!そこで待つとけ!今すぐ行ってくる!」

「あ、ちよ：：行っちゃった」

海猫は、ダツシユで川のある方に向かった：：はずなのだが

急に森が暗くなったのだ

「ちよ!!見えないけど!!ミケ!!」

「ここですよー」

「?。(。D。(いきなり後ろから現れるな!!」

「呼んだの主なのに(。・――)」

「あ、ごめんごめん」

『その人間ーと、猫？ー』

「??誰？」

「女の子ですね」

『食べてもいいのかー?』

「え?ダメに決まってるけど..」

「主、逃げた方がいいですよ...」

『そーなのかー』

と、言った瞬間に四方八方から、弾幕が現れた!

「ヤバ!!能力の使い方聞いてないけど!!」

「主!!逃げましょう!!」

「どうやって!!つて、ぎゃあ!!」

「うわあ!!」

二人とも、弾幕の雨にヒットし、目の前が真っ暗になった
意識が飛んでいくなか、謎の女の子が

「いただきまーす♪」

と言ったのは覚えていた..

少年 猫耳少年

????

目覚めた場所は、どうやら家の中だと判断出来た

「はっ：こころは??」

『お！目覚めたんだぜ！』

「主ー!!」

「お！ミケ!!と、貴女は？」

『霧雨 魔理沙、魔理沙って読んでくれ』

「あ、ありがとうございます」

「この人すんごくいい人なんだよー♪」

『たまたまそこらへん飛んでたら見かけたんで、助けてやっただけだぜ！』

「そ、そうですか」

「でも、この人もすんごくキノコ好きなんだよー」

『キノコは、美味しいぞ！食べるか？』

「あ、お腹減ってたので、頂きます」

「僕も僕も」

『分かったぞ』

女子料理中

『ほら、できたぞ！キノコのソテーにキノコご飯それにゴチャゴチャ』

「本当にキノコ好きなんですね…。」

「でも、美味しいよ!!」

と、二人とも美味しく食べていたのだが、その直後にお腹が痛くなったのは言うまでもない、

少年 猫耳少年、ゲフンゲフン

『美味しいと思うんだけどなあ』

「確かに、美味しんだけど、」

「なんか、赤いキノコが、あったような気がしましたよ、」

『ああ、あれは、毒キノコなんだぜ、一応毒は取っていたはずなんだぜ』

「毒、」

「キノコ、」

「殺す気ですか!!死んじやいますよ!!」

『毒キノコと言っても、シビレが出るくらいなんだぜ!』

「そこ、強調しなくても、」

『うん、』

『あ、後運が悪ければ、自主規制……とかあるぜ』

「あわわ、」

「この人、殺す気だ、」

「どうなるのやら、」

スキマから見ていたBBAも呆れていたのであった、

インチキ巫女は、優しいですね

少年 猫耳少年 移動中

「この道であつてゐるんですかね？主」

「さあな、後一っいいいか？」

「？何ですか？」

「歩くときだけ猫になつて俺の肩に乗るんじゃないよ」

「ケチ」

「なっ……け、ケチとは何「ケチ」

「ちよ、最後「ケチ」

「だか「ケチ」

「ケチ」

「わかつたよ、そのまんまでいいよ」

「勝ったあー♪」

「はあ」

少年達は、この後どうしようか迷っていると

魔理沙が「インチキ巫女の所でも行ってみるといいかも」

と言っていたので魔理沙に言われたとうりに、インチキ巫女改めて、博麗の巫女の所に向かっている

「ここだな」

「ですね」

『はあ、あのスキマも面倒な奴を持ってくるじゃないわよ』

「え？いきなり愚痴ですか？」

『ああ：貴方達ね、スキマが言っていた人達って：博麗の巫女博麗 霊夢よ、よろしく』

「あ、えと、海猫です」

「ミケだにや〜」

『面倒だから、ささっとするわよ』

「え？何を？」

『何をつて：能力の使い方よ』

「え？」

『え？じゃないわよ！さっさとするわよ』

少年 猫耳少年 巫女 弾幕遊び

「はあ、なんとか使えるようになった」

「ですね」

『さてと： 最後に空を飛べるようにしないとね』

「へ？んなことできませんよ？」

『できるわよ』

「どうやって??」

『はあ、こうやって』

と言い出すと霊夢は、ふわりと宙に浮いた

「： 説明がないと、出来ません」

『はあ、文句ばかり言わずにやるの、あんたがぐちぐち言ってる間に猫さんは浮いてる

わよ』

「はあ？何を言ってる」

「主ー!!浮いたよ!!飛んだよ!!」

ミケはすでにフワフワと宙に浮いていた

「うがぁー!!やってやる!!」

少年 練習中

「やつと、飛べた：： 疲れた」

「ですね：：」

『今日は家で泊まって行きなさい、あ、勿論礼なんて要らないわよ、本当は欲しいなーなんて思っていないからね』

「じゃあ、お構いなく」

「僕も」

『……………料理作ってくる……………その間お風呂にでも入っておいで』

「うん」

「わかったー」

巫女 料理中 少年 猫 風呂

「ふうー、いいお風呂だったね」

「うん」

『料理なら、机に並べてるよ、』

「ん？どうしたの？いそいそと」

『用が出来たらからそれじゃ』

「行っちゃったね」

「ああ、」

「料理冷めちやいますし食べますか」

「そうだな」

その頃、霊夢は……

『スキマー、約束の物ー』

《何かしら？ 霊夢》

『はあ、あんたから言っておいてそれはないんじゃないの、ほら』

《ああ、そういえばそうだったわね、ありがと、愛しの霊夢》

《ぶつとばされたい？》

《いやあ、怖い怖い》

『イラア』

《ふふ、じゃあね》

『あ、こら待ちなさい！： って、行ったわね、何がしたいのかしら： まあ、ロクでもな

いことでしょうね』

バカとは、仲良くできそうですね

海猫達は、イン：ゲフンゲフン、博麗の巫女から教えてもらった紅魔館を目指していた

「主、寒いですね」

「ああ、寒いな」

異常な寒さを感じながら歩いていると、目の前に広がる光景に驚いてしまった

「ミケ」

「はい？」

「今の季節はなんだっけ？」

「霊夢さんが言ってたとうりなら、夏です」

「・・・じゃあ、今の風景は？」

「冬ですね」

「冬を通り越して、南極だよ！ええ?!なんなんだよ！湖凍ってるよ！カチコチだよ！スケートリンクだよ！ええ?!ありえんだろ!!」

「主、落ち着いて」

「落ち着けないよ!!」

と、色々大騒ぎしていると、凍らせた主がフワーフワーと飛んできた

『おい! お前ら! あたいを差し置いて何騒いでるんだ!』

「あ、なんかきましたよ、主」

「ええ?!...? えつと、どなた様?」

『なっ! この幻想郷最強のあたいの名前を知らないのか?! 今日には機嫌がいいから教えてやろう! 氷の妖精チルノ様だ! どうだ! 驚いただろ!』

「ああ、霊夢が言ってた、妖精か」

「、うん、やつと状況が掴めたよ」

『霊夢は、あたいの下部だ!』

「霊夢が言ってたとうりですね」

「ああ、そうだな、さてと先を急いでるからじゃあね」

その場を去ろうとすると、チルノはいきなり弾幕を飛ばしてきた!

「ミケー」

「はい」

ミケの能力、物を跳ね返す程度の能力で何発かの弾幕を跳ね返し、チルノに当てていった

『い、痛い！もう！本気出すんだから！！氷符「アイシクルフォール」』

「ミケ」

「はいにや」

と、さつきと同じように跳ね返すようにしようとしたら、全て貫通してしまった、海猫とミケは、霊夢との特訓で弾幕の避け方も一通り避けた

「え？ちよ!!」

「おかしいなあ！ちゃんと本気出しましたよ！」

『やっぱりあたいは最強ね！』

「イラア」

「イラア」

『ん？どうした、今のうちに命乞いをしろおー』

「えい」

「にや」

ミケと、海猫は、チルノに弾幕を放った、勿論二人同時の弾幕も避けられる事もなくヒットしてしまう、スペカを未だ使えない海猫達だが、とても大人気ない

『痛い！今日はこのぐらいにしてやるからな！次からは本気出してやるんだからな』

「うん」

「わかった」

『うー、ぶーん』

チルノはボロボロになりながらどこかに去っていった

「なあなあ」

「? 何ですか? 主」

「この、氷の中に見えるものって緑色って、カエルだよな?」

「カエル? まさか? 少し見せてくださいね…… うん、確かにカエルですね」

「でも、何でカエルなんか……」

「何かあったんですかね?」

「まあ、いいよ、霊夢も言ってたけど、チルノは、本当にバカだし、何考えてるのかもわからないって言ってたし」

「ですね、主」

「?」

「寄り道に、なつてしまいましたね」

「ああ、そうだな、寄り道は、このぐらいにしてからそろそろ行くか」

「ですね」

海猫達は紅魔館目指して再出発した……

紅魔館に到着 前編

あれから海猫達は、森で迷子になったり、山で迷子になったり、と色々な事があつたがなんとか紅魔館に到着♪

「着いたね」

「着きましたね」

「……」

「……」

「大きいね」

「大きいですね」

「なあ？」

「ん？何ですか？」

「あの寝てる人って、靈夢の言ってた……」

「紅 美鈴だな」

海猫達が予想していたのは、どーんと、仁王立ちしている姿を予想していたのだが……壁に寄りかかって寝ている姿がそこにはあつた

「霊夢が笑ったわけだ…」

「ウンウン」

「入ってもいいよな？」

「大丈夫でしょ」

と、海猫達は、寝坊助を無視して紅魔館に入ろうとすると、頭上から、数本のナイフが飛んできた!!

「危な！」

「ふう、不意打ちは危ないにや」

「どっから？」

ナイフが飛んできた方を見るとそこには誰も居なかった…

「??」

「何処ですかね…？」

「さあ？、わかんないっつ!!」

と、突然海猫は気絶してしまった、それに続いてミケも気絶、一人瀟洒なメイドが立っていた…

『これが、新しく入ってきた住人…』

少年 猫 謎の部屋

「イテテ、此処は？」

「わかんないです…。」

海猫たちが目をさましたのは紅く、広い部屋だった

二人とも状況整理していると、ただならぬカリスマを漂わせた、女の子が、やって来た

『やっと目覚めたのね』

「え？誰？」

「霊夢の言ってた、レミリア・スカーレットじゃないんですか？」

『いかにも、レミリア・スカーレットよ』

「そうなのか（ヤベエ、絶対あっちゃいけない人にあつたぞ！）」

「そうなんです（ちよ、どうしますか！主）」

『さつきから何よ、心声が丸聞こえよ、全くさとり妖怪でもないのに…』

「だって！吸血鬼でしょ！ヴァンパイアでしょ！血吸われるじゃん！」

「僕は猫だから大丈夫だけど…」

『あら？そんなことないわよ、猫の血も飲もうと思えば飲めるわよ？』

「ひっ」

『まあいいわ、何もあなた達の血を吸うわけではないわ』

「なんだ、良かった」

「助かりました」

『フランの遊び相手になって欲しいのよ』

「え？、フラン？」

「確か、フランドール・スカーレット、悪魔の妹だったかな？」

『ええそうよ、魔理沙でも、呼ぼうかなと思っていただけけれども、ちょうどあなた達を見つけたから連れてきたのよ』

「拒否したら？」

『オモチャに：「ありがたくさせていただきます！」

『……最後まで言わせなさいよ』

「でも、お外で遊ばせればいいんじゃないの？」

『そうしたいのだけれども……すぐに弾幕ーって言い出すから』

「なるほど」

「まあ、霊夢の話だと、ありとあらゆるものを破壊する程度力だったかな？」

『そうよ？下手したら……ピチューンよ？』

「え？」

「…でも拒否しても、ピチューンなんですよね？」

『勿論そうよ？』

「…頑張るか」

「…そうだね」

『フランなら、地下の図書室にいるはずよ、道案内は、咲夜に頼んであるわ、咲夜』

『御意』

といきなりレミリアの隣から瀟洒なメイド、十六夜咲夜が現れた

「お?!びっくりした」

「さっきのメイド！」

『先程は、失礼しました、あのナイフは、門番にめがけてやったはずなんですけど…』

「…なるほど」

『それでは、早速フラン様の所に案内します』

後編に続く

紅魔館到着 後編

少年 猫 瀟洒移動中

咲夜 「着きました、ここにフラン様がおられます。」

海猫 「特に、何もなさそうだな」

ミケ 「ニヤー」

咲夜 「ええ、今はパチュリー様がフラン様のお相手をしていますから、それでは、私はこれで。」

と言が残すと、咲夜は消えた

海猫 「： 凄いな」

ミケ 「： (^ | ^) a」

海猫 「と言うか何時まで猫のままにいる気だ？」

ミケ 「： フランが見つかるまでだにやー」

海猫 「そうか： さてと、この扉の先だな準備はいいな？」

ミケ 「大丈夫だにや〜」

海猫 「よし、開けるぞ」

扉を開けるとそこは、並大抵の図書館とは比べ物にならないぐらいの、本棚が並べてあつた、広さも十分過ぎるほどにあつた

海猫「凄いな。」

ミケ「……」

海猫「いやいかん、まずはフランとパチュリーを探さなくては」

ミケ「…… あそこからだにや」

海猫「…… 聞こえるのか？」

ミケ「うにや」

海猫「じゃあ、行くか」

海猫は、ミケの指差した方向に進んでみた、そこからはミケの言う通り女の子が一人絵本を読んでいた。

???「だあれ？お兄ちゃん」

海猫「僕は海猫 桐谷、海猫と読んでくれ、君がフランドール・スカーレット？」

フラン「へえー！海猫お兄ちゃん私の名前知ってるんだー、そうよ、私がフランドール・スカーレット、フランでいいよ♪」

海猫「ああ、君の姉に名前を教えてもらったからね」

フラン「ねえねえ、海猫お兄ちゃん、私さひまなんだあー」

海猫「それで？」

フラン「だからさ、私と一緒に遊ぼう？」

海猫「え？」

フラン「弾幕ごっこでさ」

と言い出すとフランはいきなり弾幕を放った!!

海猫「ヤバ！」

海猫は弾幕の直撃を避けられないと思ったが、何故か弾幕が自分に当たらないのだ

ミケ「危なかったにや！早く主！」

海猫「助かった!!」

フラン「あれー？おかしいな」

と、フランが一言呟くとフランの目が怪しく紅く光った

海猫「ヤバ!!絶対なんかくるぞ！」

ミケ「あわわ」

フラン「ふふふ、禁忌カゴメカゴメ」

ミケ「え？」

海猫「おいおい、嘘だろ、周り全部弾幕だと?!」

フラン「ふふふふ、きやあ！」

フランの周りに不思議なバリアが貼られた途端弾幕は消え去った、と、同時に女の人
がため息を一つ吐いてこちらに近づいてきた

??? 「はあ、全く」

海猫 「ん？誰だ？」

ミケ 「えつと、パチュリー・ノーレッジ？」

パチュリー 「そうよ、パチュリー・ノーレッジよ。貴方達の事は知ってるわ、面倒な
事にするんだから」

フラン 「出してえー!!フランが悪かったからー!!」

パチュリー 「…暴れない？」

フラン 「ウンウン！暴れないからあ!!」

パチュリー 「いいわよ、その代わりここの整理したらいいわよ」

フラン 「うー、わかったよう」

海猫 「えつと、僕達はもうしたらいいんだ」

ミケ 「にやー？」

パチュリー 「あ、勿論貴方達も本の整理して貰うわよ」

海猫 「拒否したら？」

パチュリー 「そうね、私の魔術の生「やらせて頂きます！」」

パチュリー「：それでいいわ： 勿論その三毛猫もね」

ミケ「わかったにや」

少年 猫 少女整理中

海猫「ふう、終わった」

ミケ「楽しいですねぇ♪」

フラン「でしょ♪」

あれから結局海猫一人で本の整理をする事になった、海猫の能力である「物を操る程度の能力」を駆使しながらやっていたが、やはり体力は相当消費するようだ

その間、ミケとフランは、遊んでいた

パチュリー「やっとな終わったのね」

海猫「ああ」

咲夜「私に頼めばよかったですのに」

海猫「いきなり現れるなよ！」

咲夜「それは、すみません」

フラン「あ、咲夜ー、ご飯まだ？お腹減ったよー」

ミケ「確かにそうですね」

咲夜「ああ、食事の準備ができましたので、お呼びになりました、勿論お客様の食事も

ございます。それと、レミリア様が今日は泊まるというわとおっしゃっていたので今日はここに泊まっていってください」

海猫「助かるよ」

ミケ「お世話になりますにやー」

続編に続く

紅魔館にお泊まりします 海猫編

前回の続き♪

海猫達はレミリアの命令?により紅魔館にお泊まりする事になった☆

海猫「: 咲夜?」

咲夜「はい?」

海猫「部屋つて、ここでいいのか?」

咲夜「はい、そうですが、何か問題でも?」

海猫「問題でもつて、ここレミリアの部屋だよね?」

咲夜「ええ、そうですよ。レミリア様の命令です。勿論逆らえばピチユーンです」

海猫「はあ、分かったよ」

咲夜「それでは、私は仕事があるので」

海猫「じゃあね」

咲夜は、その場からまた消えるようになくなった。

海猫は、部屋をノックした。

海猫「失礼するぞー」

レミリア「あら？遅かったんじゃないかしら？」

海猫「なんで僕が女の子の部屋に入らなくちゃいけないんだよ」

レミリア「ええ、少し聞きたいことがあったから」

海猫「へえ、何を聞きたいのさ？こんな凡人の話聞いても面白くないと思うけど……」

レミリア「貴方の能力についてよ」

海猫「？物を操る程度の能力だけど？」

レミリア「じゃあ、私は操れるのかしら？」

海猫「無理に決まってるじゃん、僕の能力は生き物は操れないよ」

レミリア「へえ、じゃあ虫とかもダメなのかしら？」

海猫「虫も生き物の部類に入るから無理だね」

レミリア「そうなの、ありがと」

海猫「あの… お風呂とかってあるの？」

レミリア「あるわよ、ただ使ってるのは咲夜とパチュリーぐらいじゃない？私とフランクンは使わないわね」

海猫「え？流水が苦手なのは知ってるけど、お風呂とかもダメなのか？」

レミリア「いえ、別の理由よ… その理由は聞かないでね」

海猫「は、はあ」

レミリア「お風呂に入るなら、咲夜に聞くといいわ」

咲夜「お呼びでしょうか？」

海猫「……慣れつつ怖いな」

レミリア「ふふ、そんな事で驚いてるようでは幻想郷では、生きて行けないわよ」

咲夜「分かりました」

と咲夜は、言うとお消えて、猫（ミケ）を抱いて現れた

ミケ「お風呂かあ……嫌だなあ」

海猫「お魚あげるよ？」

ミケ「入るにや！」

咲夜「さてと、お風呂まで案内しますね」

海猫「うん」

ミケ「にやー」

少年 猫 お風呂上がり

海猫「ふう、気持ちよかった〜♪」

ミケ「そうですにや〜♪」

海猫「あれ？猫なのに？」

ミケ 「いいんだにやー」

海猫 「入るまで嫌がってたじゃん」

ミケ 「人間の姿になってるから楽になってるんだにやー♪」

海猫 「ふうくん：．あ、そういえばフランと何していたのさ？」

ミケ 「フランさんですか？それはまあ色々話したり、遊んだり、しましたよ？」

紅魔館にお泊りします ミケ編に続く

紅魔館にお泊まりです ミケ編&メイドさんは怖いもの
です？

海猫「で、ミケ？フランと何してたんだ？」

ミケ「えっと」

猫 少女遊戯中

ミケ「楽しいですね♪」

フラン「でしょ♪」

ミケとフランは、人形遊びに夢中になっていた

フラン「でね！このクマさんのぬいぐるみがお気に入りなの！」

ミケ「理由は、フカフカだから？」

フラン「うーん、違うフカフカしてるけどそれが理由じゃない」

ミケ「??.、それが理由じゃないのかあ...じゃあ、誕生日に買ってくれた？」

フラン「ブツブー」

ミケ「うーん、わかかないや」

フラン「正解は、お姉ちゃんが外に出してくれた時にくれたものなんだよ♪」

ミケ「へエ〜… そうなんですか、フランさんにとってはとても大切なぬいぐるみです
すね」

フラン「うん！」

フランはそう言うどぬいぐるみをギュツと抱きしめた…

ミケ「そんなにぎゅーつとして大丈夫ですか？」

フラン「うん！これは私の能力が働いても壊れないように、お姉ちゃんがしてくれたんだ！」

ミケ「へエ〜妹思いのいいお姉ちゃんですね…」

フラン「うん！… けど私に冷たくする時が昔あったんだ」

ミケ「… 聞きましたよ」

フラン「ふえ？誰から？」

ミケ「レミアさんが話してましたよ… とても悪いことをしたと、嘆いていました」
フラン「… そうなんだ」

ミケ「それと、これからはフランの自由にしてあげないと… とも言っていましたよ？」
フラン「… そうなんだ…」

と、しんみりムードが漂うところにノック音が聞こえた

咲夜「失礼します」

フラン「ん？どうしたの？」

咲夜「海猫様が、お風呂に入ると言つて、ミケも連れてこいとの事です」

ミケ「わかった」

と言つとミケは猫になつた

フラン「じゃあねー♪」

ミケ「にや」

咲夜「…猫…は…お嬢…に…合う」

ミケ「んにや？」

咲夜「なんでもありませんよ」

少年 猫 図書室

海猫「咲夜は、一体何を言つたんだよ？」

ミケ「それが物凄く小さな声で言つたのでわかりません」

海猫「咲夜さんつて表情があまり出ないよね」

ミケ「うん、不思議な人だにや」

パチュリー「それは多分咲夜に、聞いても教えてくれないわよ」

と、パチュリーは、いきなり海猫達の後ろから声がした

海猫「なっ！びつくりした！」

ミケ「うにゃ」

パチュリリー「ずっとここにいたわよ」

海猫「…影が薄いのか？」

パチュリリー「…それは言わないで」

ミケ「それで、なんで咲夜さんに聞いても教えてくれないんですか？」

パチュリリー「それは、レミイに萌えてるからよ」

海猫「え？嘘ですよね？」

パチュリリー「いいえ本当よ、だっ」パチュリリー様」

といきなり大量のナイフが投げられた！しかし！ミケの跳ね返す程度の能力で、ナイ

フは何本か跳ね返した

海猫「何するんだよ！咲夜！」

咲夜「いえ、手が滑ってしまっ」

パチュリリー「喋ると：自主規制：だ」

咲夜「いえいえく手が滑ったんですよ」

ミケ「…怖い」

咲夜「何かしら？」

ミケ「なんでもありません！お願いだからナイフを、収めて！」

咲夜「：ふふふ、お願ひしますね」

海、パチュ「：パチエリたくない」

海猫とミケとパチュリーは、咲夜が怖いものだとしきしたのであった

番外編その一 かりちゅまとメイドと魔女っ子

今回の話はパチュリー視点です♪説明不足です！テヘペロ
レーバテインの餌になる？

いえ結構です！

パチュリー「私は今見てはいけない物を見てしまった、ああ私はどこで間違ってしまったのだろうか…」

結構前に遡る

何時なんだよ!!

小悪魔「パチュリー様本持って来ましたよー」

パチュリー「あ、そこに置いといて」

小悪魔「わかりましたー…パチュリー様？」

パチュリー「？何よ？」

小悪魔「外に出られないんですか？」

パチュリー「出ないわよ、出るのは夜ね」

小悪魔「(((; 旦。)))))」

パチユリー「なっ何よ小悪魔」

小悪魔「パチユリー様、まさか夜な夜な外に出ては自主規制や自主規制をやったんですか?!」

パチユリー「:. . . へえ、そんなに実験の餌食になりたいのね?」

小悪魔「い、いえ! 滅相ありません!」

パチユリー「じゃあ、その口閉じなさい、それと私が外に出る時間は夜に決めてるのは、体が弱いからよ」

小悪魔「へええ(すげーツツコミたい、体が弱いなら、外とかに出ないだろ!)」

パチユリー「はあ、餌食にするわよ?」

小悪魔「ご、ごめんなさい!」

パチユリー達が会話をしているとノック音が聞こえた

ノックく♪

?ノックが好きなの?

いや: あのさ作者ちよつとこっちに来て

??何? トコトコ

えへへー

な、何さ

バ〇ス！

うああああ!!!

咲夜「パチュリー様、ご夕食の準備が整いました」

パチュリー「分かったわなるべく早く行くわ」

咲夜「なるべくではなく今すぐにお願ひしますねいつもパチュリー様が遅いせいで
せつかくの料理が冷めてるので」

パチュリー「…わかったわよ」

少女 魔女っ子移動中

そういうえびさ、なんでパチュリーは、魔女っ子？魔理沙とかの方が合ってるような気がするけど…

ああ、魔理沙は泥棒魔女 アリスは愛の魔女 むらさきもや・ゲフンゲフン、パチュリーは、魔女っ子になんとなくしてみただけ

ふうーん、紫もやしとか言っても大丈夫なの？

大丈夫な訳あるか！

パチュリー「本当咲夜の作る料理は、美味しいわね」

レミリア「流石は、私の従者と云った所ね」

咲夜「私には勿体無いお褒めの御言葉ありがとうございます」

パチュリー「ふう、ご馳走様」

レミリア「ご馳走しやま」

咲夜・パチュリー「……え？」

レミリア「?なんだ？」

パチュリー「レミイ、貴女今ご馳走しやまつて言つたわよ」

レミリア「そ、そんな訳ないでしょ！」

咲夜「……そうですね、パチュリー様、レミリアお嬢様がそんな事言うわけないでしょう、ふふ」

レミリア「咲夜!今笑つたわね!酷い:うー☆:もう寝る!」

と、レミリアは、半分泣き顔で自室に戻つて行つた

咲夜「……私も持ち場に戻らせていただきます」

と、咲夜はいそいそとその場から去つた

その時パチュリーは、何を思ったのかわからないがなんとなく咲夜に付いて行つてみようと言う好奇心が急にふつふつと湧いてきてしまったのだ

フラン長ゼリフよく言えたね

うん!偉いでしょ!

うんうん偉い偉い、いつかお姉ちゃんに猫耳カチューシャつけさせてうー☆つて言わ

せてあげるね

うん！絶対だよ！

いいよ、本編の方でしてあげるからね

わーいやツタア！

パチュリー「：・ちよつとだけだしいわよね」

と、パチュリーは、魔法を使いバレないように咲夜について行った運良く咲夜にバレなかつた

咲夜は慎重に謎の部屋に入って行った

パチュリー「ここね」

パチュリーは、咲夜の入って行った部屋に入った

そして驚いた

パチュリー「むきゅー?!」

咲夜「は、パチュリー様！ついてきてたんですね！」

そして一番最初の所に戻る

咲夜「本当をお願いします！他の方には言わないでください！」

パチュリー「言わないわよ、だけど烏天狗が見たら喜びそうね」

咲夜「ここの部屋だけは、あの阿保天狗には、見られないようにしてるわよ」

パチュリー「でもまさか従者の貴女が主人に萌えてるとわね」

咲夜「あうーそれは、言わないでください……」

パチュリー「……わかつてるわよ」

ちなみにその内容は、レミリアの写真集に、お人形だった

パチュリー「……わかつたわ、なるべく喋らないようにするわよ」

咲夜「なるべくじゃなくて絶対よ！」

パチュリー「……分かつたわよ」

番外編その一

かりちゆまとメイドと魔女っ子おしまい！

半人半霊と書いて半人前 亡霊と書いて可愛いもの好き

海猫達は紅魔館で一夜を過ごし、レミリアから「白玉楼にでも行けば？」と言われたので白玉楼に向かっていているのだあー

適当だなルーミア！

だってえー台本に書いてるんだから

メタイ話をするなあ！

うーわかつたよ

海猫「本当に空に裂け目があるね」

ミケ「うにゃ」

海猫「さてとミケの力は、僕のよりかは少ないから温存しとくようにと言われたし猫の状態なんだよね」

ミケ「うにゃ」

海猫「よし行くか」

少年 猫移動中

海猫「痛！」

ミケ「にやつ！」

海猫達は裂け目に入ってすぐに頭から地面にヒット！超エキ言わせねーよ！
ケチー

いいか?!これは本編だ！ルーミア

知ってるよー

だったら尺稼ぎをするな！

本当はやって欲しいくせにー

そ、そ、そ、そんなわけな、な、ないでしゅ……

語尾がしゅになってるし、震えてるよ

くっ、

海猫「いてて」

ミケ「にやつ」

海猫「さてと行くか」

ミケ「にやつ」

海猫「……………」

ミケ「……………」

海猫「……………」

ミケ「……………」

海猫「なあ」

ミケ「にや？」

海猫「降りてくれる？」

ミケ首を横に振った

海猫「だよな、なんだよこの階段の数……紅魔館にもこんなにもなかったぞ」

ミケ「うにや」

と、海猫達はぐちぐち言っているとやつと階段を登りきった

海猫「ふう、着いたね」

ミケ「……………」

海猫「ん？やっぱりここは幽霊とかいるんだね」

ミケ「……………にや」

海猫達の周りをふわふわと幽霊が浮いてる

一つだけ除けば……………」

海猫「で、これは何ですかね？」

???「……………それには攻撃しないでくださいね」

と、いきなり女の子が刀を海猫の首に置いた

海猫 「攻撃なんてしないよ！できればその刀納めてくれる？それと君の名前は？」

??? 「…分かりました、それと人に名を問う時は自分の方から答えるのが礼儀です」

海猫 「…海猫です」

??? 「魂魄妖夢です、そこ猫も名乗ってくださいよ」

海猫 「ミケ」

ミケ 「…うにゃ」

ミケは海猫の肩からひよいっと降りると猫耳生やした子供姿になった

ミケ 「…ミケだにゃ」

妖夢 「…地獄猫と同じなのかしら…」

ミケ 「…何か言った？」

妖夢 「いいえ…ここで立ち話も何ですし奥にご案内いたします」

海猫 「あ、ああ」

ミケ 「うにゃ」

少年 猫少年 少女移動中

妖夢 「ここに座ってお待ちください、お茶を淹れてきます」

海猫 「お気遣いありがとう」

ミケ 「ミルクってある？」

妖夢「あります。ミルクが良ければそれにしますが」

ミケ「お願いします！」

妖夢「分かりました（…幽々子様が見たら飛びつきそうな猫ですね…）」

妖夢は、トコトコとキッチンの方に向かった

と、入れ替わりに別の女の人がいきなり現れた

???「妖夢いる？…って、お客さん？」

海猫「あ、お邪魔してます海猫です」

???「私は西行寺幽々子、幽々子でいいわ、それとそこにいる猫耳生やした子供は？」

ミケ「ミケですにや」

海猫「もしかして猫好き？」

幽々子「いいえ、ただ橙や、地獄猫以外にも半人半猫っているんだなあと思ってね」

ミケ「へえ」

海猫「…へえー、それとさつきからヨダレが」

幽々子「あら、いけないいけないお腹減ってるのよねえ」

海猫「えつと、妖夢さんとはどんな関係ですか？」

幽々子「えつと、忘れたわ」

海猫「…え？」

幽々子「：： だから、忘れたのよこの身体になってからと言うものいちいち覚えてられないのよね」

と、幽々子は言うといきなり身体が、透け始めた
海猫「へ？もしかして幽霊？」

幽々子「：： うーん、幽霊とは違うわよ、亡霊よ、亡霊」

ミケ「亡霊？」

幽々子「そうよー亡霊」

ミケ「亡霊??? 幽霊と似てるの？」

幽々子「：： (そうだ、少し茶化してみましょ)」

ミケ「にや？」

幽々子「まあ、亡霊も幽霊も似たような物よ」

ミケ「：： にや：： ブルブル」

ちなみに、ミケは幽霊が苦手

じゃあ、なんで妖夢の半霊は、怖がらないの？

一応、怖がらせたつもりだけど…

ちやんとさせないトー

分かった

幽々子「ふふ、可愛い」

ミケ「可愛くないにや！」

幽々子「ふふふ（新しいオモチャにしたいものね）」

海猫「…あの、妖夢さん見てないで助けてあげてください」

妖夢「…いえ、見てて楽しいので」

ミケ「うーにやー」

幽々子「ふふふよしよし」

ミケ「にや〜♪」

幽々子は、ミケを弄りまくっているのだった…

海猫と、妖夢はついていけなくなったのかほったらかしにしてみました…

妖夢「あの、一つ聞きたい事が」

海猫「?何?」

妖夢「何故ここに来られたのですか?」

海猫「レミリアの紹介で」

妖夢「そうなんですか?」

後編に続く

半人半霊と書いて半人前 亡霊と書いて可愛い物好き

あれから、すっかりミケは幽々子のオモチャになってしまった…:

幽々子「♪♪♪」

ミケ「うー」

一方海猫と妖夢は…:

海猫「で、こんなだだっ広い場所にきたけどまさか?」

妖夢「物分りが早くて良かったです」カチヤン

海猫「… ええ…」

妖夢「では、いきますよ」

海猫「わかったよ」

弾幕バトルが始まった

海猫「なあ! ここの物も使ってもいいんだよな?!」

妖夢「いいですよ!」

海猫「だったら…」

と、海猫は気を抜いてしまったのか妖夢に背を向けてしまった勿論妖夢は見逃さな

かった

妖夢「敵に背を見せるとは、余裕ですわね！」

妖夢はここぞとばかりに☆☆「妖童餓鬼の断食」を使用

海猫「うぎゃ！」

妖夢「ふう、これでやった？」

それでも妖夢は、警戒を怠らなかつた

海猫「ゲホッゲホッ、この物がもう少し柔らかいと危なかつた」

妖夢「?!驚きました…」

海猫「で、周りを見た方がいいよ」

いつの間にか妖夢の周りには弾幕があつた

妖夢「… 一つの間には… ですが貴方もですよ」

海猫「… あ、本当だいい案だと思つたんだけど」

海猫の周りにも弾幕が大量にあつた

結果 引き分けになつた

妖夢「どうやって防いだんですか？」

海猫「えつと、僕の能力で… その場にあつた物を盾にして、攻撃し終わった後の立

ち位置を予測？予想してかな弾幕をおきました… まあ、当たつて良かつたです」

妖夢 「… え？あれって」

海猫 「うん、運頼みでしたよ」

妖夢 「… え？そうなんですか…。」

海猫 「僕はまだまだ弱いからね」

妖夢 「… そうなんですか」

海猫 「で、この後始末は、もしかして？」

妖夢 「あ、大丈夫ですよ、此方が直します」

海猫 「そうなのか」

と、海猫と妖夢で話していると

ミケ 「主ー！助けてー！！尻尾触ってくるー!!!」

海猫 「… 妖夢もいつもあんな事されてるの？」

妖夢 「… ええ、まあ（＾＾；；」

幽々子 「待てー猫ー♪」

ミケ 「主ー!!!」

海猫 「此処だよー」

ミケ 「居た!!」むぎゆ

海猫 「く、首が苦しい…。」

幽々子「猫ちゃん♪お姉ちゃんの言いなりになろうねえ」

ミケ「こ、怖いにや…」

海猫「く、首が…グフ」

ミケ「ぬ、主?!」

妖夢「あ、海猫さん気絶してます、それと幽々子様やり過ぎです」

幽々子「だってえ妖夢みたいに弄ると可愛んだもん」

妖夢「はあ、先ずは…海猫さんはそこに寝かしておいてください、それと幽々子様今

日の晩御飯はおかわり無し」

幽々子「ええー、ううーケチ」

妖夢「はあ、ダメですミケさんもご飯食べて行きますか?」

ミケ「うん!… けど幽々子さんの近くはちよつと怖いにや」

幽々子「ふふふ♪」

海猫「苦しかった…」

妖夢「… あ、海猫さんご飯食べて行きますか?」

海猫「うん、けど生身の人間がこんな所長居しても大丈夫なのか?」

妖夢「大丈夫では、ないけど…」

ミケ「けど、僕がちゃんと能力発動してるから大丈夫だにや!」

妖夢 「まあ、ゆっくりしていつてくください」

海猫 「うん」

ミケ 「うーにゃ！」

幽々子 「ふふふ♪今日は楽しい日だわ」

ミケ 「ブルツ！」

その後ミケは幽々子のお人形さんとなつてしまつた……

海猫と妖夢は、止めたが……暴走した幽々子は誰にも止められる事ができるわけでもなく……ミケは泣くしかできなかった……

八雲家にお邪魔します

説明は、省くけどOK？

省くの？面倒くさくて省くのね？いいのね？自主規制受けるのね？

…え？わかったから省かないから！

うん、それでいいのよ

ちっ、紫もやしの癖に

うん、魔力の餌になってもらうわ

ご、ごめんなさい！

で、説明は？

は、はい

白玉楼でお泊まりをした後、八雲紫から、話したいことがあるから家まで来てくれる？あ、勿論拒否権ないけどよろしく

と、言われ海猫は、幽々子のオモチャになりつつあるミケを連れて行った勿論幽々子は嫌がったが、妖夢がなんとかしてくれたのだった…

こんなんでもいいのかな？

駄作ね

うるさいなあ： うー

うわあ、ゴミ度がアップしたわね
うるさい！

海猫 「大丈夫か？」

ミケ 「……………」

海猫 「悪かったって」

ミケ 「……………」

海猫 「ごめん」

ミケ 「……………」

海猫 「… 鮪でいいか？」

ミケ 「ピク…………… うにゃ」

海猫 「許してくれるか？」

ミケ 「…………… にー」

海猫 「よっしゃ！」

ミケ 「フシヤー」

海猫 「…………… 完全には許してないのね」

ミケ「にや」

海猫「へ?…」

ミケ「…にや?」

海猫「わかったよ…はあ…」

ミケ「に?」

海猫「なんでもないよーだ」

ミケ「にいや?」

海猫「へいへい」

この会話の内容は、番外編にて分かります

へえーあれまたやるのね

うん、まあ内容は、メイタ話をするな!!

ご、ごめんなさい

分かればいいのよ

さてと続き続き、海猫達は、とある一軒家に立ち止まった

家の入り口には狐の尻尾が9本生えた女の人が立っていた

海猫「えつとここが八雲さん家ですか??」

??? 「紫様の客人ですね?」

海猫「あ、はい」

??? 「すみませんがその猫さんは、此方に渡してくれますか？」

海猫「ミケが、いいならいいですけど」

ミケ「うにゃん」

??? 「じゃあ、少し借りますね、紫様は寝室です」

海猫「え？ 寝室ってどこ？」

??? 「玄関を入って奥の右側です」

海猫「あ、わかりました」

??? 「それでは、ミケさんは借りますね」

と、海猫の肩からミケを取ると、どこかに去ってしまった
ちなみにこのミケさんがどうなったかも番外編でやります

メタい話ですね

煩い！

メタいねえ

続きするよ！海猫は、恐る恐る八雲家に入った

海猫「お邪魔します……」

シーン

海猫「返事は無しか… さてと、まずは寝室だっけ…」

海猫は、トコトコと寝室に向かい寝室の前で止まった

海猫「失礼します」

ガラガラ

z z z z z

海猫「へ？」

z z z z z

海猫「???」

海猫は寝室に入って布団が膨らんでいるのを発見した

寝てる人はなんとなくなが紫だと分かった

海猫「寝てる… どうしよう… まあ、待つとこ」

海猫は、置いてあつた座布団に座つた

海猫「…」

z z z z

海猫「…」

z z z z z

海猫「…」

Z Z Z Z Z Z Z

海猫「……お茶がある……暖かそうだし、入れて間もないのかな？……飲んでみ

よ」ゴクゴク

Z Z Z Z Z Z Z Z

海猫「……ウトウト」

Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z

海猫「Z Z Z」

Z Z Z Z Z

「次の話はすこーし変です！

ミケ君がちゃんに 海猫君が..... になった

..... 注意！今回はミケ君が女の子に海猫君は???が生えています！.....

感想でミケって女の子っぽいですね

と、感想をもらいそれを友達に話したところ

女の子にしちゃえば？

と、なったので、そうしました！嫌な方は次回作をお待ちください、

こんな駄作でもいい方は読んでください

藍に、連れ去られて着いた場所は竹林の中に佇む一軒の家？らしきものだった

藍「♪.....♪」

ミケ「」

ミケは一瞬猫としての本能がはたらいたのか藍から離れようとしたが.....

藍「ダメですよー猫ちゃん♪」

ミケ「ビク」

家から女の子が出てきた

??? 「あら、もう来たのかしら？」

藍「うふふふ」

??? 「あらあら、新薬がすっかり効いちやってるわね♪」

どうやら、藍には、ミケしか見えておらず、他人の言葉も聞こえないようだ

藍「うふふ」

ミケは、流石に恐怖を感じたので人型になった

ミケ「にや、にやんですか！しゃつきからにやんでしゆか！」

??? 「うふふ、無理をしても薬を飲ませた甲斐があるわ♪」

ミケ「にや・・・（逃げなくちや）」

??? 「あ、そうそうここじや逃げてても無駄よ、悪戯兎が落とし穴を作りまくってるから

♪

ミケ「にやふ！」

藍「うふふ」

と、藍は、急にばたりと倒れた

そのうちに目の前にいた女の子がミケをホールドした

??? 「あらあら、薬が切れちやったわね。優曇華」

と、女の子が言うとうさ耳生やして、制服を着た女の子が現れた

優曇華「・・・先生今日はとても」機嫌ですわね・・・」

??? 「ささつとしなさいよ」

優曇華 『... はい」

優曇華は藍をおんぶするとトコトコ何処かに行ってしまった

??? 「うふふ、猫ちゃんは私と遊びましょうね♪」

ミケ 「にや、にやんですか！僕は何もしてなよ！」

??? 「新薬を試したくね♪」

ミケ 「しん、やく？」

??? 「そうそう、新薬♪」

ミケ 「... 何の効果があるんだにや？」

??? 「お楽しみ♪」

ミケ 「教えてにや！」

??? 「うふふ、じゃあ教えたら試してもいい？」

ミケ 「いいにや」

と、ミケが言った瞬間に

謎の粉末をミケの鼻に付けた！

ミケ 「にや?!?! 話がちがうにや！」

??? 「うふふ、忘れちゃった♪」

ミケ「うー… ニヤ… ア」

ミケは粉末を嗅いでしまい、そこから意識がとうのきはじめた、意識が完全になくなる前に一言だけ聞こえた

??? 「うふふ、スキマさんは面白い事になってるだろうな」

一方、海猫の方は…

紫は、起きた

海猫は寝ている

紫「ふあわー… あら？来てたの… ね？つて、あのお茶飲んじやったのね」

海猫君は… うん、狐耳と、狐の尻尾が4本生えてます、うん

ねえー

何ですかフラン？

お姉ちゃんに猫耳カチューシャー

もう少し待ってね

うー☆わかったよー

罪袋が、見たら鼻血ものだな

海猫「zzzzz」

紫「... 全くあのヤブ医者もやってくれるわね... いや、原因は別にあるのかしら」
海猫「zzzz」

紫「うふふ、どうやって異変解決するのかしら？ 霊夢ちゃんは...」

海猫「ふあわー... あれ... 寝てたや」

紫「あら、起きたのね」

海猫「あ、起きたんだつたら起こしてくれたってよかったのに」

紫「それよりも、そこのお茶飲んだの？」

海猫「あ、はい。喉が乾いたので... 駄目だった？」

紫「いや、飲んでもよかったのだけれども... ふふ」

海猫「な、何ですか？」

紫「ふふ... ふふふふ」

海猫「はあ？」

海猫は何かおかしくて笑っているのか分からず何かおかしいと所がないか周りを見ていると、謎のモフモフした物を発見した... 勿論海猫は、自分から生えてる尻尾だとは知らずに触った

海猫「んん？」

紫「うふふ、やっと気付いた？」

海猫「えっと、尻尾があると言うことは…」

紫「ふふふ… 耳もセツトよ… ふふふふふふ」

海猫「… えっと、ドツキリ？」

紫「ドツキリだと思おう？」

海猫「… 思いたい」

紫「勿論、ドツキリでもなんでもないわよ、あははは」

海猫「笑いすぎだ！」

紫「あはは、本当面白いわよ」

海猫「くっ… そういえば、ミケは？」

紫「あら？ 一緒じゃないの？」

海猫「え？ 藍さんが連れていきましたよ？」

紫「あら？ おかしいわね、藍にそんな命令してないけど…」

海猫「へ？ 僕はてつきり紫さんの命令かと…」

と、話し合つてるといきなり玄関の方から物音がした

紫「まさか？」

海猫「見てきますね」

海猫は玄関の方に向かった… 玄関には気絶している藍がいた

海猫「藍さん?!」

紫「あらあら」

海猫「だ、大丈夫ですか？」

紫「大丈夫よ」

そう言うとき紫は藍をおぶって家に入って行った、入る前に

竹林に向かいなさい

と、紫は言った

海猫は、急いで竹林の方に向かった

一方その頃、ミケは……

ミケ「うんにやー……にや?!」

ミケは、まず自分の姿にびっくりしていた

女の子になつていたのだ!

???「あら起きたのね」

ミケ「ど、どうなってるんだにや!にやんで女の子になつてるんだにや!」

???「だって、それが薬の効果なんだから」

ミケ「治せにや!今すぐににや!」

???「いや」

ミケ「うにゃ」

??? 「ふふ、でも貴方の能力でどうにかなるでしょうに」

ミケ「…… 効果が出たら無理だにゃ…… 知ってていったんだにゃ？」

??? 「ふふふ、勿論♪」

ミケ「にゃー！ふー!!…… そういえば名前ってなんて言うんだにゃ？」

??? 「八意 永琳よ、永琳でいいわよ」

ミケ「じゃあ、永琳さん、元に戻してにゃ」

永琳『駄目♪』

ミケ「ふににに!!」

続く

異変?なのかな?

ミケ「うう、ニヤンで……」

永琳「うふふ♪」

ミケは、服が変わってます

ちなみに、どんな服なんだ?

えっと、何がいいかな?

え?……ゴスロリ?

いや、あり得ないね

じゃあ、優曇華の、服からとって小学生の制服?

うーん、面倒いし、メイド服でいいよ、

え?永琳持ってたけ?

うん、持つてるて設定だよ

そうか、

ミケ「うう……恥ずかしい……」

ちなみに、なんでミケがメイド服を着ているのかと言うと

永琳さんとの弾幕バトルに負けてしまい…

じゃあ、ミケが勝っていたら？

女体化を元に戻せるよ？

なるほど…

ミケ「うう… ヒック…」

永琳「うふふ、泣いちゃって… 可愛いわね… さてと… 他の人にも飲ませてあげないと… うふふ」

永琳は、謎の部屋に入って行った

ミケ「… ニヤ」

ミケはただぼんやりとその場に座り込んでい

「きやあ!!」

女の人の叫び声が響いた

ミケは耳がいいのでなんとなくだが、優曇華の悲鳴だというのは、わかった

ミケ「にや？、何があつたんだにや？」

?? 「… えへ☆やつちやつた☆さてと、主犯は何処かな」

ミケはこの声を聞いて希望も抱いたが、それと共に恐怖も抱いた

ミケ「主だにや…」

永琳は、優曇華の悲鳴を聞きそとの方に出て行った

永琳「あら?何かしら」

海猫「ねえ?君だよな?ミケをさらった犯人と、人里の人達が困ってる原因、それと、僕をこんな姿にした主犯」

永琳「あら、そうよ?貴方が猫ちゃんの飼い主ね?、本当虐め甲斐のある猫でしたよ、それとあのお茶貴方が飲んだのねうふふ、お似合いですよ、うふふ」

海猫「: そうですかあ」

永琳「天呪『アポロ13』」

大量の弾幕が隙間なく海猫に襲いかかる

永琳「これで、やったかしら?」

海猫「: ゲホゲホ: : ふう、危ない危ない」

永琳「あら?おかしいわね、まあそうでなくちや楽しめないものね♪」

海猫「うん、そうだね: : 操札『四面楚歌』」

永琳にめがけて今度は少ない弾幕が襲いかかるが、永琳には、すぐに避けられてしま
う

永琳「あれだけかしら?貴方の弾幕は?とつても弱いよね」

海猫「： 周りを見たら」

永琳「ん？ あら：」

永琳の周りには、さつきまで避けていた弾幕がいつの間にかあつた

海猫「人の弾幕は操れなくても自分のぐらいなら操れるよ。」

永琳「：：： へえ：：： なめたことしてくれるじゃない：：： ちっ」

勿論、永琳は、その弾幕を避けていたが海猫も相手のうごきを見つつ操っていたので、結果永琳の負けになった

永琳「：：： うーん：：：」

海猫「伸びてるね：：：」

ミケ「主ー」

海猫「おうおう、ミケ：：： ？：：： えっと、それも薬の効果なんだよな？」

ミケ「はい：：：」

海猫「：：： ふふ」

ミケ「主も笑わないでくださいよ！ 狐もどきのくせに！」

海猫「：：：： 慣れた」

ミケ「へ？」

海猫「だから、慣れたよ？」

ミケ「: うう」

永琳「貴方達、一体私はどうしてたの？」

永琳は、目を覚ました

海猫「一体もなにも、僕をこんな姿にして、ミケをおんなのこにした」

永琳「はあ? そんな事してないわよ?」

海猫「したよ!」

永琳「知らないわよ! そんな事!」

どうやら、永琳は、本当に知らないらしい:

ミケ「僕に葉嗅がせたじゃん!」

永琳「だから、知らないわよ! 私はただ昼寝をしていただけよ!」

海猫「は?」

ミケ「へ?」

ああ、異変なんですネ

海猫「で、本当に知らないのか？」

永琳「もし、こんな薬できてたらどこぞの瀟洒がとつて行くわよ！」

ミケ「うう……早く治して……」

永琳「ちよつと待って！時間が欲しいの！」

海猫「分かった……」

ミケ「うう」

ミケは恥ずかしくて猫になり海猫から生えている尻尾に掴まった

海猫「……くすぐりたい」

ミケ「うう……二……二……」

海猫「はいはい」

永琳「……ふふ……和むわね」

海猫「で、時間があれば治せそうか？」

永琳「ええ、直せるわ、ただ本当に私がやったの？」

海猫「ああ、そうだよ」

永琳 「…でも、いつそんな薬を…。」

海猫 「こつちが聞きたいね」

永琳 「私だって貴方に聞きたいことが山ほどあるわよ」

海猫 「そうか…少し思ったんだが雰囲気が違うな…。」

永琳 「え？私はいつもこの雰囲気よ？」

海猫 「…いや…戦ってたときね…」

永琳 「え？私が貴方と戦い？…してないわよ？」

海猫 「…いや、したんだって！」

永琳 「…そうなのね…。」

と、海猫と永琳と話していると…空から女の子が降りてきた

霊夢 「それは、異変ね」

海猫 「…空から落ちてきた？」

霊夢 「違うわよ！」

永琳 「じゃあ、天空のし」

霊夢 「違う！」

海猫 「で、永琳がおかしくなっていたのが異変なんだね？原因は僕が潰したよ？」

霊夢 「はあ？馬鹿じゃないの、原因は別よ別…。」

永琳 「じゃあ、私がおかしくなっていた時の記憶がないのも?… 異変のせいって事?」

霊夢 「そう: 貴女この子達だけだと思ってるけどこの子達以外にも薬を与えてるわよ」

永琳 「::: 引きこもりになってもいいかしら?」

霊夢 「::: ダメよ::: ただし人里は、一つで留まっていたから」

永琳 「わかったわ」

海猫 「まあ、人里の方が優先だね」

霊夢 「勿論」

永琳 「ごめんね、猫ちゃん:::」

ミケ 「ニー::: フルフル」

ミケは、海猫から生えてる尻尾にうずくまってる

海猫 「く、くすぐりたい:::」

ミケ 「ニャン:::」

海猫 「:::」

永琳 「アリスが見たら:::」

霊夢 「::: 瀟洒が見たら」

海・霊・永「鼻血もの」

ミケ「…ニヤ…」

海猫「可愛いでしょ？」

霊夢「ええ」

永琳「ええ、可愛いね。」

ミケは海猫の尻尾にうづくまった

海猫「…くすぐりたい…」

永琳「さてと、そのリア充は、ほつといて」

海猫「誰がリア充なんだよ…」

霊夢「異変の原因は、魔理沙のキノコ胞子よ」

永琳「は？どゆこと？」

霊夢「だから、魔理沙のキノコ胞子よ、そのキノコはもうないけど」

永琳「で、まだ終わってないんでしょ？」

霊夢「勿論、その胞子を吸ったのは後もう一人いるの」

永琳「誰よ？」

霊夢「アリス」

永琳「ああ、なるほど」

次はアリス家に突撃です

突撃!!人形の家!!!

海猫達は、アリスの家に向かっていた

永琳「♪♪♪」

霊夢「なんで、あんたまで来てんのよ」

永琳「別に良いじゃない、迷惑はかけないわよ」

海猫「と、言うか永琳さんはいつきのこの胞子吸ったのさ」

永琳「えつと、確か魔理沙に『変なキノコがあるんだが薬の材料にでもするか?』って言われて、それで、魔理沙と一緒に魔理沙の家まで行ったのよ」

霊夢「あら?わざわざ出向くなんて珍しい、道中雨でも降ったんじゃないかしら」

永琳「残念、降らなかつたわよ... それで魔理沙の家について、きのこ丸々一つも必要なかつたから、キノコのかさの欠片を一つもらつて帰つたのよ」

霊夢「ふうーん... そういえば貴女のウサちゃんは、どうしたのさ?」

永琳「ああ、あの時は頼みたかつただけ、私の薬の実験で伸びてたのよ... 魔理沙に持つて来てつて行ったんだけど」

『ついでにお茶おごるから』って言ったからついて行ったのよ」

と、話をしているとアリスの家に着いた家からは奇声が聞こえる…

海猫「怖いね…」

ミケ「二一」

霊夢「…頭のネジ大丈夫かしら？」

永琳「どうでもいいわよ、さつきと助けるわよ」

永琳達がアリスの家の玄関に近づくと、いきなり扉が開いて、人形が飛び出した人形は、狂った動きをしていた

永琳「人形の相手は私がするわ」

霊夢「そのつもりよ」

海猫「頑張ってー」

霊夢達は、アリスの家に入って行った…

中では、アリスの目がラリっていた…

そして、その足元には気絶している魔理沙がいた…

霊夢「魔理沙?!」

海猫「な、何が」

アリス「アヒヤヒヤ!! ジャマヲスルナア?!」

アリスは、狂ったように弾幕を放っていた

海猫「危な!」

霊夢「くっ」

霊夢達が弾幕を避けていた。が、しかし何故か数力所の切り傷が出来ているのである

霊夢「海猫!ここは、アリスの魔法の糸がある!気をつけて避けないと危ない!」

海猫「動き辛いのは、苦手!」

アリス「アヒヤヒヤ!!マリサハワタシノモノ!ダレニモフレサセナイ!」

アリスは未だ狂ったように弾幕を放っていた

海猫「くっ」

霊夢「仕方ない、霊符『夢想封印』」

霊夢は、大量のホーミング弾幕を発射

勿論、アリスはホーミング弾になす術なくヒットした

海猫「やったの?」

ミケ「ニヤ:?:」

霊夢「完璧にヒットしたわよ」

アリスは、倒れた:

霊夢 「よし、異変解決ね」

海猫 「だな」

ミケ 「ニヤ!!」

外に居たはずの人形達がいつの間にか海猫達の首元に剣を向けていた

永琳 「くっ」

霊夢 「はあ?!」

海猫 「何故?!」

と、倒れていたアリスが起き上がった

アリス 「ヒヒ、ヒヒニヒヒヒ」

霊夢 「… 嘘でしょ」

海猫 「… どうしてさ」

アリスは、海猫たちに向けて弾幕を発射させようとしていたが：

魔理沙 「恋符『マスタースパーク』!!」

見事にアリスにヒットした… 勿論倒れた

霊夢 「魔理沙! 大丈夫ならすぐに起きなさいよ!」

魔理沙 「ごめん、意識はあつたんだが動けなかつたんだ」

永琳 「大丈夫?… 人形も伸びてるわね」

海猫「こっちも終わりました。」

霊夢「魔理沙が美味しいところ持って行ったけれど。」

魔理沙「元は自分の撒いた種だしな」

永琳「まあ、そうね」

アリスも、永琳同様狂っていた時の記憶が抜けていた。

魔理沙が「アリスが目覚めるまで看病しとくんだぜ」

と、言った。

そして、異変は、解決したのだったためでしたしめでたし

番外編!! 変態三人集が怖いです!!

あれからアリスも元どおりになり平和に暮らしていた

あ、勿論ミケと海猫は元の姿には、戻れてない

そんなある日の出来事である・・・

海猫の家

魔理沙「おい海猫、ミケー図書館一緒に行くかー?」

海猫「行く」

ミケ「僕も」

魔理沙「じゃあ、準備が終わるまで外で待ってるぞ?」

海猫「うん」

少年 少女? 準備中

海猫「じゃあ、紅魔館に向けて」

魔理沙「出発!」

少年 少女? 魔法少女移動中

魔理沙「到着!」

海猫「いつ見ても・・・広い」

ミケ「うん」

魔理沙「さてと、私はこっちのエリアに用があるから」

海猫「じゃあ、終わったらここに集合？」

ミケ「うん」

そして魔理沙は、一番奥の本棚に

海猫は二階の本棚に

ミケは・・・ 適当にうろついてた

ミケ「♪♪♪」

ミケ「♪」

ミケ「・・・」

ミケ「暇だにや・・・」

と、ボンヤリしていると、レミリアお嬢様を発見

レミリア「うー☆」

ミケ「レミリアさん？」

レミリア「み、見るな！」

レミリアお嬢様は、猫耳カチューシャをつけている

ミケ「ど、どうしたの？」

レミリア「うー☆、フランと勝負に負けて…」

ミケ「そうですか…」

レミリア「私の従者は、鼻血出しながら追いかけてくるし…パチュリーも、変な顔で「風呂入ろって」言ってくるし…」

何故かアリスも追いかけてくるし」

ミケ「大変ですね…」

と、話していると

アリス「見つけたー♪あら、ネコちゃんも一緒じゃない」

咲夜「本当だわ」

パチュリー「魔理沙のお土産にする」

と、変態三人集が現れた!! 勿論ミケも狙ってます

ミケ「に、に、」

レミリア「逃げるわよ！」

レミリアはミケの手を引っ張りダツシユで逃げている

アリス「ハアハア」確実に狙ってます

咲夜「ドバー」出血中

パチュリー「ハアハア」狙ってます

ミケ「ニヤア!!こ、怖いにや!」

レミリア「怖いわよ!罪袋よ!あれじゃあ!」

一方その頃海猫達

海猫「おお、やつてるやつてる」

魔理沙「ミケ: ごめんだけw w」

海猫「にしてもすごいなああの、変態たち」

魔理沙「確かに、私の時はアリスとパチュリーだけだったんだが: あれに咲夜もつく

と怖いなw w」

海猫「ある意味、異変だなw w」

魔理沙「ああ、確かにw w」

海猫「あ、こけた」

魔理沙「おお、ジワジワ近づいてんな:」

海猫「ミケ: 泣いてる: レミリアに至っては固まってるw w

魔理沙あれできる?」

魔理沙「勿論だぜ: 恋符『マスタースパーク』!!」

変態は、悲鳴をあげてピチュった:」

作者―

うん？

その頃ミケたちは？

ああ、ちよつと待つてね

レミリア「も、もう少しでここから出られる！」

ミケ「やったにや。」

レミリア「もう少し：キヤア！」

レミリアは、こけた、勿論ミケも：

レミリア「こ、来ないで！」

ミケ「にや：にや：」

ミケは恐怖でレミリアに抱きついた：レミリアもミケに抱きついてた

アリス「うふふ：子猫が2人ね」

咲夜「ええ」

パチュリィ「可愛い：可愛い」

レミリアとミケは恐怖で目を強く瞑っていると

二階からマスタースパークが放たれて勿論変態三人集にヒット！

変態達は悲鳴をあげてピチュった：

海猫達はミケ達に近づくと

ミケは海猫に、レミリアは魔理沙に抱きついた

海猫「大丈夫かあ？」

ミケ「うう：怖いにやあ：：ヒックヒック」

レミリア「うう：：」

魔理沙「あーあ、折角のカリスマが：ブレイクしてるよ」

レミリア「う、煩い：」

海猫「まあ、これじゃあ仕方ないよな」

ミケ「だつてえ：ヒックヒック：：解毒薬ができてないもん」

海猫「まあね」

レミリア「魔理沙：」

魔理沙「ん？なんだ？」

レミリア「もう少しそのまま置いてくれる？」

魔理沙「はは、気にしなくていいんだぜ」

ミケ「僕も：」

海猫「えつといいけど：尻尾を時々触るの止めてくれる？くすぐりたい」

ミケ「うん」

番外編おしまい：

オマケ

海猫「ちよwwくすぐったい！」

レミリア「あら、本当にフサフサしてるのね」

ミケ「でしょ」

魔理沙「枕にはちょうどいいんだぜ」

フラン「本当にフサフサ！藍と、同じくらい！」

海猫「くすぐったいって！ちよ、あはは」

花畑に行こう

海猫の家

海猫 「そういえば… 花を見たいね」

ミケ 「うにゃ… そんなにやことより…」

海猫 「わかつてるけど… 先ずは里の人が第一」

ミケ 『にー…』 ボン!

ミケは猫になったそして海猫の尻尾に掴まった

海猫 「… くすぐりたい…」

ミケ 「にー!」

海猫 「はいはい… で、花畑には行く?」

ミケ 「うにゃ!」

海猫 「じゃあ行こっか」

少年 猫移動中

花畑

??? 「… あら… お花を荒らしに来たのかしら」

???は、愛用の傘を、持ち出し海猫達を見ていた…

海猫「凄いな〜」

ミケ「にや〜」

海猫は、お花を一輪摘んだ

海猫「綺麗だね…」

ミケ「ニヤ〜♪」

???「そのお花と同じにしようかしら?」

謎の女性は、海猫に傘を向けていた…それも、殺気が物凄く漂っていた…

海猫「え、えつと…幽、幽香さん?」

幽香「ええそうよ、風見幽香よ」

ミケ「に〜」

幽香「あら? 貴方達…噂の人達ね」

海猫「ふえ?」

ミケ「に?」

幽香「まあ、いいわ…それより、そのお花私が育てたのよ」

海猫「…」

ミケ「」

幽香「わかってるわよね？」

海猫「え、えっと…拒否権は？」

幽香「ふふ、ないわよ？」

海猫「」

ミケ「」

幽香「ふふふ」

その後…海猫は幽香の手によってフルボッコになった…ミケには何も被害がなかった…

流石に幽香も理由を聞かずにやったのを後悔したのか自分の部屋に海猫を入れた勿論ミケちゃんも…ミケはすぐに人型になった…

海猫「…うう…」

ミケ「だ、大丈夫なのかにや？」

幽香「大丈夫よ…それと…そこの猫ちゃん」

ミケ「…猫ちゃんって僕の事？」

幽香「そうよ…貴女以外に誰がいるのよ…貴女男よね？」

ミケ「そうだにや」

幽香「でも…その服に…その髪…その姿…女の子そのものよね？」

ミケ「うにや：：話すと長いにや」

幽香「へえ、気になるから教えてもらえるかしら？ 勿論お茶も淹れるわよ」

ミケ「ミルクがいいにや！」

幽香「ふふ、わかったわ」

会話中

幽香「大変ね：：って事は：：海猫も：？」

ミケ「そうだにや」

幽香「：：へえー」

ミケ「まあ、そんなこんなでこんな姿だにや」

幽香「もしかして慣れた？」

ミケ「：：うにや：：慣れたにや」

幽香「へえー：：そうなの：：で、海猫」

海猫「：：なんだよ」

幽香「あら、不貞腐れているのかしら？」

海猫「：：痛いんだよ」

幽香「ふうーん：：で、あの摘んだ花はどうしようと思っていたのかしら？」

海猫「え？：：庭にでも一輪置いとこうかと：：」

幽香 「向日葵よ? : 里でも種ぐらいあるじゃない」

海猫 「だって! あれはどう見ても素人が作れる花じゃないから!」

幽香 「 : なるほどね」

ミケ 「にや?」

幽香 「じゃあ : 一輪だけあげるわよ」

海猫 「?! 本当か?」

幽香 「本当よ :」

海猫 「やった!」

ミケ 「うにや! やつたにや!」

その後海猫とミケは上機嫌に家に戻った : :

幽香 「ふう :」

紫 「あら、珍しいわね」

幽香 「 : : ノックぐらいしなさいよ」

紫 「ふん、いいじゃない」

幽香 「んで、なんの用よ」

紫 「貴女も、褒められると嬉しいのね」

幽香 「はあ?」

紫「ふふふ」

紫はそう言うどどっかに行った

幽香はただイライラするのだった・

ミケが.. 酔った..

今日は異変解決の宴会.. 何時もなら異変解決後にするもののだが.. 人里にも迷惑がかかっていたので人里が落ち着いたら宴会をする事になっていたのだ.. そしてその日が今日なのだ..

海猫「僕は.. ジュースでいいや」

霊夢「何よー釣れないわね.. こういう時こそお酒ぐらい飲みなさいよー」

海猫「いや、だって.. 僕成人迎えてないし」

霊夢「そんなのどうでもいいのよー」

海猫「.. いや、本当お酒いいから」

霊夢「何よー」

フラン「そうだーそうだー」

レミリア「お酒が嫌なら.. 私が飲んでる人の生

海猫「お断りします!」

レミリア「ふうーん.. じゃあ..」

フラン「あれを」

魔理沙「するんだぜ！」

魔理沙とフラン、レミアアはいきなり海猫の尻尾を弄り始めた

勿論海猫には、免疫が付いてないのでくすぐりたい：

海猫「ちよ！やめ：くすぐりたいから！」

魔理沙「辞めないんだぜ！」

フラン「うん！」

レミアア「面白いし」

その頃ミケは：

ミケ「うにや：：」

永琳「ふふ：じゃあね」

永琳が解毒剤と称して：猫猫特性マタタビと言うものをミケに飲ませた：勿論

ちやんと効くのか橙に試したところ効いたので：ミケにも使ったのである：：

その後酔ったミケを妖夢は、発見して：皆の所に運んで来た：

妖夢「皆さーん：：なんかミケさんが変ですよー」

海猫「ど、どうしたんだ？」

ミケ「にやんでもにやいれひゅよー」

霊夢「酔ってるわね」

魔理沙「ああ、それもすごいな」

フラン「顔が真っ赤だねえ」

レミリア「大丈夫なのかしら..」

ミケ「にゅひー」

ミケはいきなり海猫に抱きついた

海猫「こりや.. マタタビ酔いだなあ」

ミケ「にゃんれひゅかー」

ちなみに.. 皆から見ればミケは、上目遣いの目でいて今すぐにも食べたい感じである.. 海猫は特に興味もないので特に何も変化なしであった..

魔理沙「アリスが見たら」

レミリア「瀟洒が見たら」

霊夢「パチュリーが見たら」

海猫「鼻血もの？」

ミケ「にゅひーかまってくらひゃいよー」

ミケは時間が経つに連れ酔いも回ってきて..

妖夢「大丈夫ですか？」

海猫「うん.. 慣れてるから」

ミケ「にゅひー。あそんれくらひゃいよー」

海猫「はいはい」

海猫は慣れた手つきでミケを撫で始めた

ミケ「えへへーなれられたあ〜」

海猫「もういいか？」

ミケ「ううーもつとー」

海猫「へいへい」

妖夢「凄いですね」

霊夢「まさかあのミケが」

魔理沙「あんなんになるなんてな」

フラン「おどろいたあ！」

レミリア「正直私も驚いてるわ」

ミケ「すきでしゅー」

海猫「はあ、お前元々男だろ？」

ミケ「モウなんれもいれひゅよー。ひゅにーすきれひゅよー」

海猫「…酔ってるからってそんなにやけにならなくても…」

続く

ミケちゃんが...

ミケ「スウー スウー」

霊夢「寝てるわね」

魔理沙「ああ、それも...」

海猫「... 何時もの事です」

ミケは猫になり海猫の尻尾を枕にして寝てます

フラン「お姉ちゃん？」

レミリア「何よ？」

フラン「私も！」

レミリア「? いいわよ？」

フラン「やったあ！」

フランはレミリアの背中に寄りかかって寝始めた

フラン「お姉ちゃんの背中暖かい...」

レミリア「... それは... 貴女の姉だからよ」

フラン「ふふふ」

レミリア「な、何よ？」

フラン「なんでもないもん」

レミリア「気になるわね」

フラン「おしえなーい」

レミリア「教えなさいよ」

フラン「おわすみー： スウ： スウ：」

レミリア「あ、ちよ： はあ」

魔理沙「なあなあ」

霊夢「いやよ？」

魔理沙「まだ何も言っていないんだぜ！」

霊夢「どうせ、私もく：とか言い出すんでしょ？」

魔理沙「違うんだぜ！お酒のお代わりなんだぜ！」

霊夢「：：自分でどうにかしなさいよ：：」

魔理沙「ちえ」

妖夢「魔理沙さんお酒なら注ぎますよ？」

魔理沙「お！助かるんだぜ！」

レミリア「それじゃあ： 私達はそろそろ帰るわね」

魔理沙「お！じゃあな」

霊夢「じゃあね」

妖夢「お気をつけて」

海猫「おやすみー」

レミリアはフランをお姫様抱っこして帰って行った。

妖夢「えっと…海猫さんは…お酒はダメなんですよね？」

海猫「ああ…」

妖夢「じゃあ…オレンジジュースのお代わりにいいんですか？」

海猫「うん…」

妖夢はオレンジジュースを海猫のコップに注いだ。

分かる人はわかると思いますが…

海猫「…ゴクゴク…」

妖夢「こ、これでいいんですか？」

幽々子「いいのよ」

紫「ふふふ」

霊夢「ふふふ」

魔理沙「ふふふって、いつから幽々子と紫は来たんだよ！」

紫・幽「今さつき」

海猫「……」

紫「ふふふ…どうなるのかしら」

海猫「…あのな…気づかないとでも思ったか」

妖夢「へ？」

海猫「…あのな今さつき注いだコップは、入れ替えたよ？」

妖夢「へ？」

紫「は？」

幽々子「は？」

霊夢「げ？」

魔理沙「ぐ？」

海猫「…勿論…そのコップに入ってるお酒は、アルコール度が物凄く高くなって
るよ?…ロシアンルーレットになってるよ?」

海猫はそう言うとお酒の入った、コップを5つ持って来た

紫「拒否権は？」

海猫「ないよ?…逃げるんだったらフランから事前に借りたスベルカード『スターボ
ウブレイク』を使用します」

妖夢「.:」

霊夢「終わった.:」

紫「ふふふ.: スキマでどうにかすれば.:」

幽々子「逃げれるわね」

魔理沙「.:」

海猫「大丈夫です.: スキマも今なら使えません!」

紫「何言ってるの」

紫はいつも通りスキマを開けようとしたが.: なぜかスキマが出現しない

紫「な、何したのよ!」

海猫「前に.: かつぱさんにあつて.: その時にありとあらゆる能力を封ずる程度の機械を作つてもらつて.:」

霊夢「はあ?」

海猫「ま、そんなこといいからさきさつと」

海猫とミケを除く五人は.: コップに入つてるお酒を飲んだ.:

妖夢「キヤア!」

海猫「あ、ヒット」

紫「助かった.:」

幽々子「あら、楽しみ」

霊夢「： 鬼ね」

魔理沙「：： だな」

それから一時間近く妖夢はのたうち回った：：
オマケ！

海猫「よしよし」

ミケ「スウースウー」

海猫「可愛いなあ」

ミケ「ふにや？：： にやんでしゆか？」

海猫「： 酔いは醒めたか？」

ミケ「まだ： クラクラするにや：：」

海猫「じゃあもう少し寝るか？」

ミケ「うにや：」

海猫「よしよし」

ミケ「： 主：： しゆきですよ：： スウースウー」

海猫「よしよし：：」

小悪魔さんと咲夜さんと海猫くん.. ついでに妖夢

パチュリー「小悪魔」

小悪魔「なんですか？パチュリー様」

パチュリー「本買って来てくれるかしら？」

小悪魔「わかりました」

と、時同じく..

咲夜「うーん..」

咲夜「..」

咲夜「材料が足りないわね.. 買ってこようと..」

カリスマの部屋

レミリア「？咲夜？」

咲夜「お嬢様、今から買い出しに行つてきます」

レミリア「あら？昨日も買わなかったかしら？」

咲夜「はい.. 大変お恥ずかしい事なんです..」

まして.. 買ってなかったんですよ..」

調味料が少ないことを.. 忘れてい

レミリア「なるほど。まあいいわいってらっしゃい。あ、ついでに。新しいお菓子も頼むわよ」

咲夜「わかりました」

白玉楼では：

妖夢「はあ：。幽々子様」

幽々子「？何かしら？」

妖夢「何かしら？。じゃなくて！食べ過ぎです！」

幽々子「ええー！だっていつも通り食べてるじゃない！」

妖夢「あんな大量に食べて。そしてつまみ食いしてましたよね？」

幽々子「^^；」

妖夢「どうなんですか？」

幽々子「だってえ、我慢できなくて：。」

妖夢「はあ：。」

幽々子「？何処に行くの？」

妖夢「買い出しです！」

幽々子「いってらっしゃーい」

海猫の家

海猫「… うーん… 今日… 鍋にでもするか？」

ミケ「うん！お魚もいれるよね？」

海猫「ああ、いれるよ？… ただ材料がないから買わなくちゃな…」

ミケ「にやー… いつてらっしやいだにや！」

海猫「ちよ！まだ何入れるか決めてないんだよ！」

ミケ「うーん… この前の宴会で出たものじゃダメなのかにや？」

海猫「ああ… よし… 決めた… ふんじや… ミケお留守番と掃除お願い」

ミケ「分かったにや！」

人里♪

咲夜「ふう… このぐらいかしら…」

妖夢「あ！咲夜さん！」

咲夜「あら、腹ペコ幽霊の餌を買いにきたのかしら？」

妖夢「はい… はあ… 貴女は？」

咲夜「私？私は… 買い忘れを買いに来たのと… 紅茶に合うお菓子を買いに来たの

よ」

妖夢「そうなんですか…」

その頃… 小悪魔…

小悪魔「ふう：このぐらいいかな？」

小悪魔「：さてと：そろそろ帰ろうかな：？：ん？あれは：確か：海猫さん？」

小悪魔「何しにきたんだろう：」

海猫「：えつと：あれに：これが：」

小悪魔「海猫さん？」

海猫「？あ、小悪魔さん：こんにちは：今日は何故人里に？」

小悪魔「えつと：私はパチュリー様の新しい本を買いにきました」

海猫「：：そうなんだ」

小悪魔「えつと、海猫さんは？」

海猫「僕は、今日の晩御飯の材料を、買いにきたんです」

小悪魔「そうなんですか」

海猫「にしても、本凄い量ですね：」

小悪魔「いえ、いつもの量ですよ」

海猫「?!そうなんですか：」

小悪魔「はい！」

咲夜「あら？小悪魔に海猫」

妖夢 「こんにちは」

小悪魔 「珍しい」

海猫 「ですネ」

咲夜 「あなた達も買い出し？」

海猫 「はい」

小悪魔 「はい！私は本を買いに来ました！」

妖夢 「そんな大声で言わなくても..」

瀟洒 半人 少年 悪魔会話中

海猫 「そんな事が有ったんですね」

妖夢 「はい、あの時は大変でしたよね」

咲夜 「うんうん」

小悪魔 「確かに： あ、そろそろ皆さん帰りますか」

海猫 「うん、そうだね」

妖夢 「それでは」

咲夜 「また」

海猫 「ただいまー」

ミケ 「おかえり！」 むぎゅー

海猫「?!いきなりどうした?!」

ミケ「暇で暇で仕方なかったんだにや!」

海猫『なるほどー:」

ミケ「にや!」

海猫「ちゃんと買つてあるぞ」

ミケ「やつたにや!」

海猫「そいじや: 作るか!」

ミケ「うんにや!」

にゃー (|| ^エ^ ||)

海猫 「ミケ？ 今日だっけ？」

ミケ 「うんにゃ！」

海猫 「確か： 八雲家の橙とミスチーのお店でお食事だっけ？」

ミケ 「うんにゃ！」

海猫 「ミケ： 男つてのを忘れてないか？」

ミケ 「だって： 解毒薬作れなかったテヘペロ： っって言われたもん、主のやつも」

海猫 「?!マジか?!」

ミケ 「うんにゃ」

海猫 「はあ： ぁ、お金もったの？」

ミケ 「にゃ？ ミスチーさんが： タダでいいよ！、 っって言つたんだにゃ！」

海猫 「： ならいいや： まあ行つてらっしゃい」

ミケ 「うんにゃ！」

時同じくして： 八雲家：

藍 「橙： 準備したの？」

橙 「できてるにや！藍しやま行つてくるにや」

藍 「行つてらつしやい」

ミスチーのお店：

どのようなお店なのかは：：ご想像にお任せします。

橙・ミ 「乾杯！」

橙 「ふにやー美味しね」

ミケ 「うにや！」

橙 「そういえば：：ミケの主つてどうなの？」

ミケ 「直球だにや：：えっと：：優しいにや」

橙 「どう優しいの？」

ミケ 「えっと：：なんだろ：：なんか色々優しいにや！」

橙 「いきなり抱きついてきたりするのかにや？」

ミケ 「僕がしてるにや」

橙 「：：私の所は逆だにや：：こつちが甘えると：：それ以上の事をしてきて正直疲れ

るにや」

ミケ 「大変なんだね」

橙 「うん：：」

スキマー

紫「あらあら： 言われてるわよ」

藍「橙！そんなところも可愛い！」

紫「：： 聞く耳持たずね」

ミケ「： とういえば： 橙って他に友達いるの？」

橙「いるよー学校行ってるから」

ミケ『へえー： 学校？』

橙「えつと： 寺子屋か： とある妖怪が寺子屋を開いててそこに通ってるんだにや」

ミケ「へえー： 先生って怖い？」

橙「怒ると怖いよ？」

ミケ「行ってみたいにや：：」

橙「主に頼んでみたらいいかもにや：」

ミケ「そうだにや！主にお願ひしてみよつと！」

橙「ねえ」

ミケ「？」

橙「えいや！」

ミケの耳を尻尾を掴んだ

ミケ「あはは！くすぐったいにや！」

橙「へえ、やつぱりちゃんとかくすぐったいんだにや」

ミケ「そうだにや。主は一度も触れてないけど」

橙「私もだにや、ふれようとしたらすぐに離れるにや！」

ミケ「?!そうなのかにや？触れようとするのかにや？」

橙「そうだにや！抱きつくと時々ふれようとしてから紫様に助けてもらってるにや！」

ミケ「大変なんだにや」

橙「そっちが羨ましいにや。」

ミケ「外の世界で住んでた時も優しかったにや」

橙「あ、そっか外の世界からきたんだもんね」

ミケ「うにや」

橙「あ、そろそろ帰ろっか」

ミケ「そうだにや」

ミスチー「今度からはお金もらいますからねえ」

ミケ「わかったにや！」

橙「うん！」

海猫の家

海猫 「♪♪♪」

ミケ 「ただいまー」

海猫 「お帰りー」

ミケ 「主何やってるんだにゃ?」

海猫 「よし出来た!」

ミケ 「にゃ?」

海猫 「ああ、ミケのワンピースだよ?」

ミケ 「ありがとうにゃ!」 むぎゅ

海猫 「はは、よしよし」

ミケ 「でもいつ寸法なんて?」

海猫 「?この前女の子服一緒に買いに行ったやろ?あの時ね」

ミケ 「そうなのかにゃ!」

海猫 「うん。」

ミケ 「主好きだにゃ!」

海猫 「はいはい、よしよし」

ちなみに海猫は嬉しいのか尻尾を振っていたそうだ:

おかしな事…

文「海猫さん！」

海猫「？何？」

文「私とフランさんと一緒に地底まで行きませんか？」

海猫「いいけど… あ、ミケも連れてくけどいい？」

文「構いませんよー」

海猫「ミケー」

ミケ「うにゃ！」

ミケはワンピースを着ている

文「あや？ミケさんそれは？」

ミケ「主に作ってもらったんだにゃ！」

文「へえー、意外な一面ですね」

海猫「まあね… そういえばなんで地底に行くのに僕達も連れてくの？」

文「いやあ、取材のアシスタントをお願いしようかと」

ミケ「行く！」

海猫「なるほどね：で、なぜゆえフラン？」

文「えつとですねえーいろんな人達をアシスタントにさせていたのですが、フランさんと椀がとでも良かったんですよねえー、それで椀に頼んだんですけど既に仕事があつたので、それでフランさんに頼んだんですよー」

海猫「なるほど、肝心のフランは？」

フラン「此処だよー」

フランは文の背後からひよっこり顔を出した

文「では行きますか！」

鴉天狗 吸血鬼 猫 少年移動中

文「着きましたね」

海猫「なあ、地底って：地霊殿なの？」

フラン「そうだよ？もしかして洞窟かと思つた？」

海猫「うん、まあいつか」

ミケ「うにゃ？」

文「では気をつけてくださいねえ」

文達は地霊殿の入り口である大穴に入った

海猫「？あの蜘蛛みたいな人と桶？樽？に入った人は誰？」

文「蜘蛛みたいなではなく土蜘蛛のヤマメさん、それと釣瓶落としのキスメさんですね」

海猫「ほええ？今は寝てるの？」

文「おかしいですね、サボってるのかな？w」

海猫「おいおいww」

フラン「あとね！橋姫のねパルスイがいるよ！」

ミケ「ふにゃ？」

文「ヤマメさんは病気（主に感染症）を操る程度の能力キスメさんは鬼火を落とす程度の能力パルスイさんは嫉妬心を操る程度の能力ですね」

海猫「物知りだねー」

ミケ「にゃにゃー」

文「あや、そろそろ地底の都に着くようですね」

海猫「？都？」

文「はい、都です。まあ、旧地獄何ですけどね。実際なら廃れていくところが嫌われ者の集まりで賑やかになりましたね」

ミケ「ふにゃー、にゃ？」

???「へえー珍しい客人だねー」

文「あや！星熊さん！お久しぶりですね！」

海猫「？知り合い？」

ミケ「にやあ？」

フラン「えつとね、鬼だよ」

星熊「あんたら見ない顔だね誰だい？」

海猫「海猫ですよろしく」

ミケ「にやー」

星熊「・・・すまん猫語は、わかんないんだ」

ミケは海猫の尻尾から降りると人型になった

ミケ「ミケだにや、よろしく」

星熊「私は、星熊 勇儀だよよろしく」

海猫「そういえばさつきから何で文さんは、震えてるのさ？」

文「いええ、鴉天狗は苦手なんですよねえ」

ミケ「え？でも優しそうな人だけど。」

海猫「力は強そうだね」

星熊「強そじゃなくて強いんだよ」

海猫「ほええ」

星熊「よし、地上の者と関わりはもたないようになってるんだよね。少し遊んでいきな」

海猫「え？」

鬱のオーラ

星熊「：：：戦いたいところなんだが：：：今日は立つてるだけでも精一杯なんだよな：：：すまんな」

文「え？」

フラン「??」

海猫「は？」

ミケ「どゆこと？」

星熊は、近くにあつた椅子に腰をかけると、話始めた

星熊「あのな：：：ヤマメ達が寝てるのは見たか？」

文「はい見ましたが：：：それが何か？」

星熊「実は、ここ最近：：：みんながこんな感じなんだよな」

海猫「へ？」

星熊「地上ではどうなんだ？」

文「皆ピンピンしてますよね？」

フラン「うん」

ミケ「にやー」

海猫「うん」

星熊「地霊殿のみか。」

文「これは：面白そうになってきましたね」

海猫「そういえば：小石ちゃん？ときとりちゃんは？」

星熊「あの子達？：あの子達なら頑張ってるけど：ペット達が皆伸びてるからね。」

と話合つてると一人の脇巫女こと、お賽銭巫女さんがやつてきた

霊夢「どうやら：異変のようね」

海猫「でも、そんな能力の人なんて居た？」

ミケ「にや？」

霊夢「そうね：ただ妖怪で一人だけ可能なのが一人だけいるわ」

文「ルナサさんです」

霊夢「そうよ：どうやらあの三姉妹別々で演奏してるのよ。」

海猫「ふえ？」

ミケ「どゆこと？」

霊夢「あの三姉妹がどうやら喧嘩して：バラバラになって演奏してるのよ、まあ、他

の二人は捕まえたは：でもルナサー人だけと舐めちやいけないわよ」

文「確か：鬱の音を演奏する程度の能力でしたっけ？」

霊夢「それもそうだけど：手を使わずに演奏する能力あるわよね」

文「はい」

フラン「うん」

海猫「？」

ミケ「??」

霊夢「どうやったのか知らないけど：何故か大量の楽器を一度に演奏してるのよ」

文「はあ？」

海猫「でも：音がしないよ？」

霊夢「それなのよ：何故か音がしないのに：能力だけ発動されてるのよ。」

星熊「そういえば：この前河童が：変な機械を持ってきてたな。」

霊夢「もしかして：」

文「音を消してる？：ですがひとつ問題が発生しますよ？」

海猫「音を聞かないとダメなんですよ？」

ミケ「もしかしたら：音を消してるけど：その能力は発動してるとか？」

霊夢「まあ、難しい事は異変解決後にしましよ：長居は禁物よ」

文「ですね」

ミケ「うにゃー」

ミケはいきなり猫になりうみねこの尻尾に乗った！

海猫「あ、はいはい」

霊夢「多分……ルナサは、強くなってると思うわよ」

文「まあ……星熊さんがあれですからね……」

海猫「と、いうか……音の発信音がわかんないとどこにいるかわかんないけど……」

霊夢「それもそうね……」

ここで続く！

皆で仲良く演奏したいの

ルナサ「♪♪♪♪」

霊夢「見つけた」

海猫「あ、幽霊さん」

ミケ「うにゃー」

フラン「ふにゅー」

文「あやや、フランさんとミケさんはダウンですね」

ルナサは、音楽を奏でながら喋り始めた

ルナサ「なあに？遊びにきたの？」

霊夢「演奏をやめてもらえるかしら？」

海猫「地霊殿の皆さんがだれてますから」

ルナサ「ええー邪魔するの？邪魔するなら……」

ルナサの周りに弾幕が出現

霊夢「へえ、そうなの？」

海猫「実力行使……？」

文「私はフランスさんとミケさんを木陰に寝かせますね〜」

霊夢「文それしたらすぐにきなさいよ」

文「あや？ 脇巫女霊夢さんが弱音ですか？」

霊夢「違うわよ！あの幽霊のせいで力が弱まってるのよ！」

文「あややや！そうでしたか？」

ルナサ「そろそろおしやべりはお終いにしようね」

ルナサは、霊夢、海猫に向けて弾幕を放った

海猫「よつと」

霊夢「…いきなりね…」

文「置いて来ましたよー」

ルナサ「じゃあ、始めよー」

ルナサは、何発かの弾幕を放っている

海猫、霊夢、文は息を合わせながら弾幕を放っている

ルナサ「私の演奏を邪魔しないでよね！」

霊夢「演奏する場所を考えなさいよ！霊符『夢想封印』」

ルナサはヒラリと避けた

ルナサ「私は本気よ！」

海猫「やめてください…。狂符『狂気のジャグリング』」

ルナサはひらりと避けた

ルナサ「だから一人で演奏させてよ！」

文「あややや、止めませんね…。風符『風神一扇』」

ルナサは、ひらりと、ドガン!!

ルナサはヒットした

文「あやや、これは霊夢さんと、海猫さんのスペルですね」

霊夢「そうよ」

海猫「うん」

地霊殿の皆は段々と活気を取り戻してきた

ルナサ「ヒック…。ヒック…。」

霊夢「なんで一人なのよ…。」

ルナサ「だって…。みんな合わせてくれないもん…。」

海猫「じゃあ、自分から合わせればいいんじゃないの？」

ルナサ「違うんだよ…。日替わりで合わせてくれるんだけど…。その時は私だったの

に…。ヒックヒック…。」

海猫「なるほど…。」

文「皆さん連れてきましたよー」

文はメルラン、リリカを連れて来た

メルラン「ごめん…」

リリカ「ごめんなさい…」

ルナサ「ちゃんと合わせてくれる?…」

メルラン「うん!」

リリカ「だから…一緒に演奏しよ?」

ルナサ「うん!」

プリズムリバー三姉妹で演奏始めた

霊夢「いいわね…」

小石「そうだねえー」

さとり「…いいですね」

燐「うん」

空「そうだねー」

星熊「お酒がすすむねえ」

海猫「…いつの間にこんなにも…」

文は、カメラで撮っている

ミケとフランは：：二人で寄りかかって寝ている：

海猫「ミケとフランは僕が連れてくね」

文「お願いしますー」

霊夢「気をつけて」

小石「：：：：ふふ付いて行くうつと：：：」

無意識ならなんでも…

海猫「♪♪♪」

ただいま海猫君は宴会帰りで猫化してるミケを尻尾に乗せ

フランちゃんをお姫様抱っこした状態で紅魔館に向かってますよー…閉じた恋の

瞳も一緒（海猫達は知りません）

海猫「♪♪♪…二人ともぐっすり寝てますね…」

ミケ「…うんにゃー…にゃ…」

フラン「…姉……がと……ふにゅ…」

海猫「…可愛ね」

こいし「…ふわふわ」

海猫「…」

こいし「ピュン（弾幕を放った）」

海猫「よっと」

こいし「ピュン」

海猫「はっと」

こいし「ピュン」

海猫「おっと」

海猫「・・・ とうか・・・ なぜ弾幕が時々来るんだ?・・・」

こいし「ピュン」

海猫「そこらかな?・・・ ピュン」

こいし「きやつ!」

海猫「一発ヒット?」

こいし「ううー痛いー」

海猫「大丈夫?」

こいし「痛いよー」

海猫「えつと・・・ こいしちゃん?」

こいし「そうだよー」

と、海猫とこいしは二人で並びながら歩いてます

飛んずると思ったそのあなたプギャー

よし、グングニルの餌決定：ね霊夢

や、ヤメテヨ一作者がいつたに決まってるじゃないですかやだー

よし、フランの拷問の刑ね

あわわわわわ

海猫「……で、なんで付いてきたの？」

こいし「ん？暇だから」

海猫「なるほどね」

こいし「それより重くないの？」

海猫「重くないけど？」

こいし「そうなんだー……じゃ、私も」

海猫「ダメ……のるところじゃないでしょ？」

こいし「猫ちゃん持って尻尾に乗るもん」

海猫「……ダメ」

こいし「乗るのー」

海猫「……わかったよ……でもまずは紅魔館にフランを届けてからね」

こいし「うん！」

紅魔館前

海猫「こんばんはー」

こいし「こんばんはー」

咲夜「あら？門番……また寝てるのね」

海猫 「いや？起きてたけど…顔パスだよ？」

こいし 「うん！」

咲夜 「あ、なるほどね…で、妹様を届けてくれたんですね」

海猫 「うん」

海猫は咲夜にフランを渡した

フラン 「スウースウー…うにゅー」

咲夜 「ふふ、ありがとね」

海猫 「それじゃね」

こいし 「じゃあねー」

咲夜 「気をつけて」

こいし 「約束ー」

海猫 「あ、はいはい」

海猫はミケを抱っこし、こいしを尻尾に乗せた

こいし 「モフモフー」

海猫 「…くすぐりたい…」

こいし 「モフモフーモフモフしてるー」

海猫 「くすぐりたいよ…ふふ」

こいし「分かったよー」

海猫「： さとりさん困ってるんじゃないですか？」

こいし「あ！忘れてた！じゃーねー」

海猫「はや！」

その後海猫は歩きながら家に帰った

海猫「ふう：： ミケを寝かせないとな」

トコトコ

海猫「おやすみ、ミケ」

ミケ「：： うんにや：：」

海猫「よしよし」

寒くなる... へつくちゆ

海猫の家

ミケ 「こたつーこたつ♪」

海猫 「?もうそんな季節か?」

ミケ 「寒いもん!」

海猫 「まあ... 寒いがまだまだ大丈夫だろ?」

ミケ 「こたつー!」

海猫 「だって: いつも僕の尻尾で暖をとるじゃん」

ミケ 「こーたーつー!」

海猫 「だーめ」

ミケ 「こたつ!こたつ!こたつ!こたつ!こたつ!」

海猫 「わかったから... こたつ出すから」

ミケ 「やったあー!」

海猫 「ちよつと待つといてくれる?」

ミケ 「にや!」

海猫「出してくるね……トコトコ……確かこの部屋に……あつたあつた……うんしよつと」

海猫は物置部屋からこたつを出してきた

ミケ「コタツ！」

海猫「あ、待ってね」

海猫は、こたつをセツトした

ミケ「ぬくぬくしてないよー」

海猫「時間が経てば暖かくなるよ」

ミケ「それじゃ……ぼん（猫化）」ぼすん（海猫の尻尾に掴まった）

海猫「ほら、やつぱり」

ミケ「にやー♪」

海猫「はいはい」

ミケ「にやん♪」

海猫「ふふ」

海猫は少し顔がにやけていたのであつた……

紅魔館

レミリアの部屋

レミリア「ふむ... そろそろあの季節かしら？」

咲夜「はい」

レミリア「準備は、進んでるのかしら？」

咲夜「はい、今回はフラン様と一緒にやっているため、去年よりもっと明るいとおもいますよ」

レミリア「... そう... やっぱりフランは... 恨んでるのよね...」

咲夜「いいえ？ 妹様は楽しんでいましたよ... というか張り切っていましたよ」

レミリア「張り切ってる？」

咲夜「ええ、お姉様よりもっと凄い物にするって... 張り切ってますよ」

レミリア「そうなのね...」

咲夜「あの時のお姿は、見ておくべきでしたね... ふふ」

レミリア「そう... 私も見たかったわね」

咲夜「お嬢様は私達と違って長生きですから見れますよ... きつと」

レミリア「駄目よ... 私の従者なら... 吸血鬼になっても長生きしてもらおうわよ」

咲夜「... 分かりました」

レミリア「大丈夫よ、パチエも、小悪魔も門番も、一緒よ」

咲夜「ふふ、そうですから... それは嬉しいですね」

レミリア「ふふ、そうかしら？」

咲夜「そうですね、この生活は楽しいですから」

レミリア「ふふふ、もつと楽しくなるわよ」

咲夜「分かりましたよ。」

紅魔館

パーティ会場

フラン「ねえねえ、美鈴ー」

美鈴「何ですかー」

フラン「綺麗かなー？」

美鈴「もう少しつけた方がいいと思いますよー」

フラン「うん、わかったー」

パチュリー「ふふ」

小悪魔「どうしたんですか？」

パチュリー「いや、フランが外に出るようになってからとても明るくなったなあつてね」

小悪魔「そうですねー」

パチュリー「さてと： 私達も手伝いますか」

小悪魔 「はい！」

レミリアの部屋

レミリア 「そういえば：招待状は、書いてるのかしら？」

咲夜 「もう、出してますよ」

レミリア 「流石ね。」

咲夜 「いつもの事ですから」

レミリア 「ふう：くるのかしらね」

咲夜 「大丈夫ですよ」

続々かも！

コラボその1

紅魔館

フラン「モフモフー！」

ミケ「モフモフー！」

橙「モフモフー！」

海猫「くすぐりたい…」

藍「ふふ、まだ慣れてないんですか？」

海猫「なれないよ…」

今日は紅魔館でクリスマスパーティーをしている

その光景を羨ましく見ているフランに似た異端の翼を持つ少女がいた…

???「ウズウズ…」

咲夜「ふふ、紅月…大好きな猫が二匹もいて大変ですね」

その少女の名は紅月葎佳…フラン専属のメイド

吸血鬼と妖狐のハーフである

見た目は5歳だが…実際の年齢は329…

紅月「…ウズウズ…で、でも…」

咲夜「そういえば…人見知りだったわね…ふふ」

紅月「ううー…」

咲夜「ふふ…よつと」

紅月「ふえ?え?!」

咲夜は、ひよいと、紅月を抱っこするとフラン達の方に連れて行った

咲夜「妹様」

フラン「ん?なあに?…つて?紅月?!」

紅月「は、フランしやま!おじゆくじゃにえ!!」

フラン「紅月落ち着いて!」

咲夜「ふふふ…w」

海・ミ「誰?」

橙「えつとね?なんでしゆかね?藍しやま」

藍「フラン専属のメイドよ」

少女 少年混乱中

フラン「来るなら来るって行ってくれば良かったのに」

紅月「すみません……」

フラン「でも、来てくれたならそれはそれで嬉しい！ぎゅ！（紅月に抱きつく）」

紅月「ふえ？え?!ええ?!」

フラン「紅月……お帰り」

紅月「あ、えと……ただいま」

ミケ「（海猫の尻尾をモフリ中）……」

海猫「くっ……ふふ……ふふ……（笑いをこらえています）」

橙「（藍の尻尾をモフリ中）」

藍「……ふふ」

レミリア「ふふ……面白い事になってるわね」

咲夜「はい」

レミリア「にしても……まさかあのスキマが来るとは思わなかった……」

咲夜「……まあトナカイ役を連れてきたし良かったじゃないですか」

レミリア「……それもそうね」

紫「……ウフフ」

神様「返事がないただのしかばねのようだ」

作者「……（生臭いケチャップ塗れ）」

神様以外みなさんサンタ姿： 作者もトナカイ役に入っていたのだが：： 神様がとあの爆弾を踏んでしまい：：： ゲフンゲフン

霊夢「ふうー：： 美味しいね」

魔理沙「そんな事言つてないで助けてくれよー」

霊夢「嫌だよー」

アリス「魔理沙は私と呑むの！」

パチュリー「：： 私と呑むの」

魔理沙「二人とも一緒じゃダメなのか？」

ア・パ「だめ！」

霊夢「ふふふ」

魔理沙「助けてくれえー!!」

チルノ「大ちゃん！」

大妖精「どうしたの？チルノちゃん」

チルノ「リグルと、ルーミア連れて来たー」

リグル「大ちゃん！」

ルーミア「きたのだー」

大妖精「ふええ、チルノちゃん凄いな」

チルノ「あたいは最強だからね！」

ルーミア「今日は皆んな可愛い姿してるのだから」

リグル「可愛い子は、可愛くするもんなんだって」

ルーミア「そーなのかな」

幽々子「うふふ」

妖夢「どうしたんですか？幽々子様」

幽々子「いや、今回はとても面白いなあつね」

妖夢「そうですね」

幽々子「さてと食べよつと」

妖夢「まだ食べるんですか?!」

幽々子「ええ？そうよ？」

妖夢「はああ……」

紅月「スウ…… スウ……」

フラン「スウ…… スウ……」

ミケ「スウ…… スウ……」

橙「スウ…… スウ……」

藍「スウ…… スウ……」

海猫「寝ちゃってるや…」

紅月「…うう… いや… こわい… いや… (うなざれている)」

海猫「??」

フラン「うん?… ギュ(紅月に優しく抱きつく)」

紅月「… お嬢様… 好…」

海猫「… 静かに紅茶を飲む」

レミリア「そういえば… 緋月は?」

咲夜「あの子なら…」

小悪魔「へえー楽しかったんですか?」

緋月「楽しかったですよー」

美鈴「へえーそれは良かったですね」

緋月「まあ… ここほどではないね」

小悪魔「あ、それはわかります」

美鈴「確かに」

緋月「まあ、私は先輩がいればいいんですけど…」

小悪魔「おやおや」

美鈴「ふふ」

レミリア「ふふふ…。」

咲夜「面白い組み合わせでしょ？」

レミリア「ええ、そうね… ふふ」

文「… 大量のネタですネ…。」

海猫「？文さん」

文「あややや？海猫さん… どうしたんですか？」

海猫「楽しまないのかなーってね」

文「新聞記者たる者いつ何処にネタがあるか分かりませんか」

海猫「と、言いつつその衣装は？」

文「あやや、やはり突っ込まれましたか」

海猫「つつこむよ」

文「そこの方々は、寝ているですか？」

海猫「そうだよ」

文「起きるのをお待ちで？」

海猫「まあね」

紅月「ニコニコ」

フラン「ニコニコ」

文「ニコニコですね」

海猫「だね」

フラン「起きてるよ」

紅月「ええ」

ミケ「にやー」

橙「にやー」

藍「ふふ」

海猫「起きてたんかい？」

そのあと、文も入れてから楽しいパーティーは続いた

今回は夜も遅いので、紅魔館にお泊まりになった。

フランの部屋

フラン「紅月： どうだった？」

紅月「どうだった？： パーティーは、楽しかったですよ？」

フラン「じゃなくて、休暇はどう過ごしたの？」

紅月「えつと：： 1人洞窟でぼんやりしてましたね」

フラン「暇だったの？」

紅月「はい……」

フラン「(自身の膝をぼんぼん叩く) おいで」

紅月「え?……でも……」

フラン「大丈夫だって誰も見てないし」

紅月「……(フランの膝の上に乗る)」

フラン「ギュー」

紅月「ふえ?」

フラン「充電中ー」

紅月「……(顔が真っ赤になる)」

フラン「ふふ、ぎゅー」

クリスマスパーティーから、あけおめ

クリスマスパーティーも、無事終了し、新年を迎える宴会を博麗神社で、やっていたにとり「新しいもんだよー」

柊「文さん……さつきから尻尾を触ろうとするのやめて」

文「ええーいいじゃないですかあー」

柊「ダメです」

海猫「……ぼんやり……」

ミケ「にやー、ギユ（海猫の尻尾に捕まる）」

海猫「うん？…どしたの？」

ミケ「にやー♪」

海猫「ふうーん：…ヨシヨシ」

ミケ「にやー♪」

文「ほら、彼処のイチャラブのように触らせなさいよー」

柊「いやですー」

文「もう、いいです、えい」

椛「ふえ?!」

文「うん、これはいいですねー」

椛「やめてくださいよ…… ふふ……」

文「もうすこしー」

椛「ふふ…… くすぐったいからあ…… ふふ……」

文「はい、もう少し楽しんでらねえ〜」

椛「ふふ…… 早めに…… ふふふ…… お願いします…… あははは……」

霊夢「イチャラブが、二組もいると邪魔ね」

ミケ「僕は男だぞー」

霊夢「おわ、猫型でも喋るのね」

ミケ「そだよー」

霊夢「でも、今は女の子でしょ?」

ミケ「そだよー」

霊夢「海猫の事も好きなんでしょう?」

ミケ「そだよー」

霊夢「じゃ、カップルに見られてもおかしくないわよ」

ミケ「へえー」

霊夢「聞いてる?」

ミケ「聞いてるけど、尻尾もモフリたいのー」

霊夢「…一本くらい触らせなさいよ」

ミケ「いいと思うよ?」

霊夢「じゃあ、ぎゅ」

海猫「今日は賑やかだね、霊夢」

霊夢「zzz」

海猫「ミケ:もしかして霊夢寝てる?」

ミケ「うにや、寝てるにや」

海猫「どしよ」

すると、レミリアの後ろに控えてた咲夜が近づいてきた

咲夜「私が寝室まで運びますよ」

海猫「あ、お願いします」

ミケ「にやー」

咲夜は、慣れた手つきで霊夢を尻尾から引き離すとスタスタと寝室に行つた

と、咲夜が寝室に向かうのと同時にフランとレミリアが

此方に来た

フラン「ミケー！」

ミケ「ニヤァ：ポン（人間になる）」

フラン「海猫ー尻尾触らせてー」

海猫「いいけど、暴れたりしないでね」

フラン「うん！」

ミケ「レミリアは、いいの？」

レミリア「そ、それじゃあ、私も触るけどいいかしら？」

海猫「いいけど？」

フラン「えい！ギュー！」

レミリア「私も！ギュー！」

ミケ「ギュー」

と、その様子を遠くから見ていた咲夜がいた…

海猫「びく、な、なんだ… 殺気が…」

レミリア「咲夜よ…」

海猫「な、なるほど…」

アリス「アヒヤヒヤ…」

魔理沙「大丈夫なのか？」

パチュリー「アリス? : 大丈夫なの?」

アリス「大丈夫れりふしよ!」

魔理沙「大丈夫じゃ、ないわね」

パチュリー「はあ、これじゃダメね」

アリス「ほひたこー」

魔理沙「アリス」

パチュリー「えい」

アリス「きゃ!」

魔理沙「パチュリー?」

パチュリー「勘違いしないでよね、ライバルがいないと張り合えないんだから」

アリス「zzzz」

魔理沙「なるほど、なんだかんだと仲いいんだな」

パチュリー「まあね、これでもお中元とか送りあうなかだし、本とか借りにくるしね、それと写真交換とかね」

魔理沙「うん、聞かない方がよかったな」

パチュリー「ふふ」

海猫「ふう : 今日月は綺麗だなあ」

ミケ「主ー」

海猫「海猫で、いいよ」

ミケ「じゃ、うみねこー」

海猫「なあに？」

ミケ「ほすん（海猫の膝の上に座る）」

海猫「？」

ミケ「特等席ー」

海猫「あ、なるほど」

その時の海猫は尻尾をばたつかせていたようだ…

番外編!!!作者の遊びです!!

海猫「zzzz」

ミケ「zzzz」

橙「zzzz」

魔理沙「寝てる…」

パチユリー「…まあ、ここなら風邪もひかないし大丈夫よ」

咲夜「…念のために魔理沙手伝って」

魔理沙「へいへい」

さて、何故こうなったのか遡るよー

作者：私の願いは？

いつか叶えるよ

偽りは？

フランの件

いいわよ

海猫「こたつはいいねー」

ミケ「にやにやあー」

海猫「ミケ、こたつの中で丸くなるのは危ないから尻尾で暖まるか？」

ミケ「にやあ！」

ミケはこたつから出るや海猫の尻尾に掴まり包まった

海猫「早いな… 3秒かかってないぞ？」

ミケ「にやにや！」

海猫「暖かいか？」

ミケ「にや」

海猫「そうか、よしよし」

ミケ「にやあー」

などといちやいちやしていると玄関からトントンと叩く音がした

あの尻尾モフりたい！それといちやいちやするんじゃないわよ！

まあまあ紫さん、落ち着いて…

あの、ミケと海猫といい、藍と橙といい… いちやいちやしちやつて！尻尾も、触り

たい放題だし！くう！

わかったから… ね？落ち着いてね？

はあはあ… わかつてるわよ…

魔理沙「入るぞー」

橙「ミケちゃん」

魔理沙「図書館に行こうかと思ってな」

橙「私もー、借りた本を返しに行こうかと。」

海猫「あ、じゃあ、僕もついでに行くよ」

ミケ「にや.:. zzz」

魔理沙「ミケは寝てるな.:」

橙「うーん、そのまま連れて行くこと出来ないの?」

海猫「できるけど?」

橙「じゃあ、一緒に行こ?」

海猫「うん」

キング・カット!

図書室までね

パチュリー「あら?珍しい客ね」

橙「だって、借りた本があるから」

海猫「僕も」

ミケ「あるにやー」

パチュリー「…こあ」

小悪魔「はいはい、借りた本があるなら渡して下さい」

海猫「ほい」

ミケ「はい」

橙「はい！」

小悪魔「これで全部ですね」

海猫「僕達のは、これで全部だよ」

橙「私も」

小悪魔「そうですか」

魔理沙「本をまた借りるぞー」

パチュリー「： 勝手にして： その人達もはしやがなければここに居てもいいわ
」^よ

海猫「うん」

橙「うん！」

魔理沙は二階、海猫、ミケ、橙は、一階の所に別れた

海猫「…ペラ（本をめくる音）」

ミケ「（海猫の尻尾を枕にして本を読んでいる）」

橙 「(ミケと同じ態勢)」

海猫 「…ペラ」

ミケ 「… z z z」

橙 「… z z z」

海猫 「… z z z」

ミケ 「… z z z」

橙 「… z z z」

魔理沙 「海猫く帰る「しっ」

小声だと「」が『』になります！

魔理沙 『なんだ？』

パチュリー 『寝てるのよ』

海・ミ・橙 「z z z」

魔理沙 『なるほど』

そして時は戻り出す

何かっこつけてんのよどうせ客間までカットでしょ？

……

え？ 凶星?!

うん…

あ、なんか、色々ごめん

いや、いいんだよ…

海猫「zzz」

ミケ「… zzz」

橙「zzz」

咲夜「にしても、海猫さんは本当に男なんですかね？軽すぎますよ。」

魔理沙「まあ、ちっちゃくなってるしな」

咲夜「あ、そうでしたね」

レミリア「咲夜、今回は客が多いんじゃない？」

咲夜「妹様の遊び相手が増えたと思ってください」

レミリア「冗談よ： 来る人が増えるのは嬉しいからね」

フラン「お姉ちゃん！」

レミリア「しいー」

フラン「うん！」

EX!!

海猫達は……森の中に居た

ミケ「トコトコ……」

海猫「ミケ？何処に行くんだ？」

ミケ「小屋だにや」

海猫「？小屋って森の中に？ルーミアにでも会いに行くのか??」

ミケ「うんにや！なんかチルノちゃんと言ってたんだけど、ルーミアちゃんのおかしいって言ってたんだにや！」

海猫「なるほどな、で、寒くないのか？」

ミケ「大丈夫だにや！」

海猫「なら、いいんだが……つと、結構奥まで入ったな」

ミケ「確か……ここら辺に……あつたにや！」

海猫「看板?……」

ミケ「ココから少し歩いた所に小屋があるにや！」

海猫「なるほどな……」

トコトコ：と進んで行くうちに段々と暗くなってきた：

海猫「近いのか？」

ミケ「にゃ！」

???「おや？海猫達かい」

海猫「ん？何処から？」

ミケ「：. . .」と言いか誰かにや？」

???「ああ、この姿は見せてなかったな」

と、暗闇から現れたのはまさしく大人の女性と言える人が現れた

海猫「え？誰？」

ミケ「えつと：. . . そーなのかー？」

???「ミケ正解」

海猫「え?!ルーミア?!」

ミケ「?!びつくりだにゃ」

ルーミア「そこまで驚かなくても：. . . まあ、無理もないか」

海猫「えつと：. . . え?!」

ミケ「何がどうなったらそうなるんだにゃ！」

ルーミア「まあ、説明するから落ち着いて」

ミケ「：．． それにしても本当：． 大人の女性だよね今のルーミアって」
海猫「確かに：．． 紫とはまた違うな：．」

ミケ「でも、紫さんって色々とかわりにくいし掴みどころがないよね」

ルーミア「まあ、紫は、ああ見えて努力してるからね、あれこそ縁の下の力持ちだよ」
海猫「へえー：．．」

チルノ「よし！あたいはサイキョーだけでもつとさいきよーになる！」
と、チルノは言うと一目散に森を出て行った

大妖精「えつと：．． 今日泊まっても」

ルーミア「ああ、いいよ？ただ、また幼い私になるが今話してる記憶はないからね」
大妖精「あ、わかりました」

海猫「：． それじゃあ、僕は帰るね」

ミケ「ええーうみねこもー泊まろうよー」

海猫「：．． いいのかね？」

ルーミア「あ、いいよ？」

海猫「じゃあ、泊まるよ」

ミケ「やったあー！大ちゃん！うみねこの作る料理は美味しいよ！」

大妖精「楽しみですね」

ルーミア「へえーそりやあ、楽しみだね」
海猫「あんまり持ち上げないでよな」
続く！

E
X
?!!

ただいま

大妖精 海猫 ミケはルーミアの家に泊まっています

そういえばミケと海猫はいつもセツトよね

あ、はいミケからしたら海猫は彼氏以上ですかね海猫は普通に家族と思っ
てます
が……

へエ……なんか面白いわね

そうですかね……まあいつか人それぞれだし

ルーミア「美味しいわね」

大妖精「確かに！この肉じゃがとか美味しい！」

ミケ「でしょ！」

海猫「そう、言われると恥ずかしですネ／／／／」

海猫の尻尾が、びよこびよこ動いている

ルーミア「ミケちゃんは幸せものですねー」

ミケ「うん！」

ルーミア「確かに、毎日こんな美味しい物食べれて：海猫お前主婦か？」

海猫「いやいや、ただ幻想郷の外に住んでた時に料理をしててね」

ルーミア「なるほどね」

大妖精「へえー： そういえば： ここのお外ってどんな感じなの？」

海猫「まあ、此処よりか便利であり： その分空気がね： 汚いと言いますか：」

ミケ「少なくとも此処より綺麗じゃないねー」

大妖精「ふえー： そうなんだ」

ルーミア「まあ、私達は外にはいけないけど：」

紫「勿論行かせないわよ」

といきなり隙間が出現して顔をひよっこり出してきた

大妖精「ひゃ?! 紫さん?! 脅かさないうでください!」

ルーミア「まあた覗き見か？」

紫「ふん、人食いより可愛いわよ」

ルーミア「私は過去形、貴女は現在進行形でしょ」

紫「あ？」

ルーミア「え？」

紫とルーミアの間に火花が散っている

大妖精 「なんだろ」

海猫 「ものすごく」

ミケ 「怖いにや・」

ルーミア 「ま、どうせ霊夢の盗撮でもしてたんでしょう?」

紫 「は? しちやいけないの?」

海猫 「しちやいけないよ!」

紫 「ふん! 此処じゃあ、外の世界と違うのよ」

ミケ 「じゃあ、変態」

大妖精 「・・・気持ち悪い・・・」

ル・紫 「?!?!はえ?!?!」

海猫 「・・・大妖精から・・・」

ミケ 「い、意外な発言が・・・」

大妖精 「っは! すみませんすみませんすみませんすみません!!!」

紫 「いいのよ! 変態なのは分かってるから!」

ルーミア 「そうよ! 変態行動するのが悪いから!」

海猫 「うんうん」

ミケ 「うん」

大妖精「は：い、わかりました：でも紫さんごめんなさい」
紫「い、いいのよ」

ルーミア「以外な一面が見れた：」

海猫「大妖精も、言うときは言うんだね」

ミケ「だにや（ボフィン）猫になる」

大妖精「あうう：（いわゆる、うー☆状態）
数時間後：」

大妖精「すう：すう：」

ミケ「海猫の尻尾の上に乗った状態で寝てる」

海猫「料理を運んでる」

紫「：ふう：懐かしい」

ルーミア「：へえー：」

海猫「：2人に何があつたんですか？」

ルーミア「まあ、色々だね」

紫「霊夢の一個上の人だね」

海猫「へえー：そうなんですか：」

ルーミア「まあね：懐かしいわね」

紫「へえー：：貴女が言えるセリフかしら？」

ルーミア「煩いわね：：」

紫「：：まさか、今でも考えているのかしら？」

ルーミア「さあ、どっちでしょうね」

海猫「僕の質問に答えてくださいよー」

ルーミア「もう少し大人になってからね」

海猫「けち」

紫「ふふふ、そういえば：：そろそろ戻るんじゃないの？」

ルーミア「そういえば：：そうね：：」

紫「さてと：：海猫：：もう一品作ってよ」

海猫「へいへい」トコトコ

ルーミア「スキマなのだ」

紫「あら、ルーミア：：よしよし」

ルーミア「えへへ、どうしたのさ？」

紫「今から海猫が料理を持ってくるわよ」

ルーミア「お腹減ってるのさー」

紫「ふふ：：一緒に食べよっか」

ルーミア「うん！」

海猫「持つて来ましたよーって…戻ってるし」

ルーミア「?なんなのだろ？」

海猫「なんでもないよ」

ルーミア「そーなのかー」

海猫「紫一品で足りるの？」

紫「いや、もう三品かしら？」

海猫「へいへい…」トコトコ

ルーミア「美味しいのだー」

紫「ふふふ、そうね」

それから時間がたち

闇少女 少年 睡眠

紫は1人スキマの中にいた

紫「ふふ…平和ね…」

紫「続かかしら…この平和が…」

紫「…また、運命の悪戯が、来るのかしら…」

紫「…いや…あの子なら…大丈夫よね…」

紫「……………あの子なら……貴女みたいな運命は……辿らないわよね……………」
紫「ふふ……私らしくないね……少し幽香の所にも行こ……」

思い通りにはならないよ!

注意! 題名と、全く関係ありません

海猫は、只今材料を買うため人里に続く道をミケと一緒に歩いています

海猫「そういえば・・・ここ最近鍋物とか美味しいな」

ミケ「うん、確かににゃー」

海猫「やつぱ、寄せ鍋?」

ミケ「それがいいにゃ!」

海猫「朝はその残り物で味噌汁でも作ってから・・・」

ミケ「それと、昼はその具材を使って焼き飯!」

海猫「それいいね!」

ミケ「にゃ!」

???「ばあ!!!」

と草むらから傘を持ったお化けが脅かしに来た

海猫「そういえば、ミケはお魚とか要らんのん?」

ミケ「うん!」

??? 「ばあ!!!」

海猫 「まあ、食べ過ぎは危険だしね」

ミケ 「うん」

??? 「…：無視は酷すぎる…：」

海猫 「だって…：風見さんが前に家来た時ね『此処には傘を持ったお化けがいるんだよ、んでそいつをポコポコにするか、無視するかしたら面白いよ』って言ってたもん」

ミケ 「確か…：名前は…：なんだっけ？」

??? 「多々良小傘だよ！」

海猫 「そうそう！」

ミケ 「本当に面白いにや」

小傘 「うう…：ひどいよ」

海猫 「問答無用に脅かす方がひどいと思うけど」

小傘 「脅かすのが仕事だよ！」

ミケ 「あ、そうなの？」

小傘 「そうだよ！」

海猫 「あ、僕は買い出しがあるからね」

ミケ 「じゃあーね！」

小傘「あ、待ってよー、私も付いていく!」

海猫「何故?!」

小傘「暇だから」

ミケ「自由人?」

小傘「違うよ!」

海猫「まあ、勝手にしんさい」

小傘「うん!」

人里

ミケは猫になり海猫の尻尾に捕まっています

海猫「おっちゃんこれ何円?」

肉屋の店員「それねー100g125円!」

海猫「じゃあ200g?ちようだい」

肉屋の店員「毎度!」

海猫「あ、500円からでね」

肉屋の店員「ホイお釣りと、ご注文の品ね: お兄ちゃんいつも来てくれるからオマケ

しといたよ!」

海猫「ありがとう!」

肉屋の店員「じゃ、これからも宜しく！」

海猫「うん！」

と、必要な材料を買い……人里をウロウロしている

海猫「今日は、本でも買おつか」

ミケ「ニヤー」

小傘「？本なら、紅魔館で借りれるんじゃないの？」

海猫「まあ、そうだけど……なんとなく買ってるんだよ」

小傘「ふうーん」

と、古本屋に入ったら其処には……小悪魔がいた

海猫「あ、小悪魔さん」

小悪魔「あ、こんにちは」

小傘「ふえ？」

小悪魔「あ、小傘さんもこんにちは」

小傘「こ、こんにちは」

海猫「今日もパチュリーの？」

小悪魔「あ、はい」

海猫「良いものは見つかりそう？」

小悪魔「うーん、どうですかね私からしたらいい物何ですけどね。」

海猫「あ、なるほどね」

小傘「えつと……小悪魔は、よくここに来るの?」

小悪魔「いえ、ただ今日はここで……いつもバラバラですよ?」

海猫「まあ、今日はたまたまだよね」

小悪魔「はい!」

小傘『……顔が広いんだな』

海猫「?何か言った?」

小傘「あ、なんでもないよ」

と、古本屋で本を買い……そして帰り道

海猫「今日は得したね」

ミケ「にや!」

小傘「へえー」

ミケ「そういえば……今日は八雲家一家が来るんだよね?」

海猫「うん、そうだよ?だからちゃんと部屋は準備したし……服は自前のやつを持っ

てきてもらうし……お酒も買ってるし……」

小傘「なんで、八雲家一家が来るの?」

ミケ「えつと：： 橙と、紫が言ったんだよね？」

海猫「うんうん」

小傘「へえー：： 行っても大丈夫？」

海猫「僕は困らないけど？」

ミケ「僕も困らないにゃ！」

小傘「じゃあ、お邪魔になる！」

こうして、続く

人遊び

皆「カンパニー！」

只今海猫の家で、八雲一家と小傘と一緒にパーティーをしているのだ
なのだ。

そーなのかー

お気楽ですねー

紫「呑むわよー！」

藍「ここは海猫の家だと言うこと忘れないでくださいね」

紫「忘れてないわよー、どうせ帰るときはスキマを使えばいいじゃん♪」

藍「ですが！」

紫「ほら、藍も堅苦しくならずに呑んだ呑んだ！」

藍「……」

橙「そうでしゅよー藍しやま！」

藍「橙が、言うなら……」

と、藍も杯に溢れんばかりの日本酒を注ぎ……一気に飲み干した

20 未満はお酒飲んだらいけんよ！

海猫「呑んだなあ」

小傘「ええ、あんなにも呑むんですね」

ミケ「ビツクリだにゃ」

紫「ほらー、海猫も、ミケも、私が持ってきたお酒飲んだ飲んだ！」

海猫「え？ 僕お酒はちよつと」

ミケ「うん」

と、紫はスキマを使い海猫とミケを捕まえた

海猫「え？ ちよ！」

ミケ「にゃー!!!」

紫「藍、橙」

藍「はい」

橙「にゃー♪」

と、海猫とミケにお酒を無理やり飲ませた

海猫「ゼエゼエ……」

ミケ「ハアハア……」

紫「うふふ」

藍「やっぱり、パーティーだからね」

橙「ニヤー♪大丈夫かによ？」

小傘「… 橙に、藍ものすごい変わりよう…」

海猫「大丈夫… だと思おう？」

ミケ「……………」

紫「?… ミケ？」

ミケ「…………… う……………」

藍「う？」

ミケ「うにやう……………」

ミケは顔を赤くしてフラフラと海猫の尻尾にしがみつく

ミケ「うにやう、うひねこー」

海猫「ちよ！ミケ！大丈夫か?！」

橙「もう、酔ってる！」

小傘「… スキマさんやり過ぎじゃないんですか？」

紫「いいじゃない♪面白しい♪」

小傘「だからってあれは……………」

ミケはべろんべろんによっており、海猫もだんだんとしてきて…………

海猫、ミケにされるがままである

ミケは海猫を弄り倒して

紫「うふふ、凄いわね」

橙「すうーすうー」

藍「…… 橙の頭を撫でてる」

小傘「…… 紫さん…… やり過ぎですよ」

ミケ「うにやー…… モフモフ」

海猫「…… ほえ……」

ミケ「モフモフ…… モフモフ」

海猫「ふにや……」

紫「ウフフ♪」

藍「私は一足先に帰りますね」

小傘「あ、じゃあね」

紫「私はもう少しいるわよ」

藍「はい」

と、藍は橙を起こさぬように背負い帰っていった

ミケ「モフモフ…… モフモフ」

海猫「ふにゆ……」

小傘「……ふふ」

紫「あら？、小傘人の事言えないんじゃないの？」

小傘「だって……面白いもん……ふふ」

紫「ふふ： 人で遊ぶのも悪くないでしょ？」

小傘「……うん」

紫「うふふ」

ミケ「スウー……スウー……」

海猫「スウー……スウー……」

そして、記憶がぶっ飛んで慌てふためいたのは言うまでもない

作者の遊び !!!!

海猫の家

文「海猫さあーんお手紙ですよー」

海猫「手紙? …… 誰から?」

文「ええー、ミケさん宛と海猫さん宛にあるんですけど、ミケさんはフランさんから、海猫さんは星熊さんからですね」

海猫「へ?」

ミケ「はえ?」

文「お疲れ様です」

海猫「行かなければ…。」

ミケ「海猫、パチエる?」

文「あ、はいそうですねえ」

海猫「… 覚悟を」

ミケ「決めてくださいいね♪」

少年 少女準備中

ミケからやるねー

ミケ「こんにちは美鈴」

美鈴「ミケさんこんにちは今日はフランさんの招待で来たんですよ」

ミケ「うん！」

美鈴「中で咲夜さんが待ってますよ」

ミケ「わかった！」

フランの部屋前

ミケ「コンコン」

フラン? 「開いてるよー」

ミケ「お邪魔します！」

フラン? 「ふふ：こっちに来てよ」

ミケ「はい：？」

フラン? 「ふふふ」頭ナデナデ

ミケ「ふにや：フランさん? (撫で方が違うような)」

フラン? 「ナデナデ」

と、フラン?がミケの頭を撫でるといきなり扉がいきなり開いた!!

フラン「お姉様！」

フラン? 「きや!」 ボフォン

ミケ「にや?!」

フラン? は、パチュリーの魔術によつて変化してたレミリアだった

フランは、レミリアが怯んだ隙にすかさずミケに抱きついた

ミケ「にやあ?」

フラン「これは私の猫!」

レミリア「ちえ、バレちゃった、でも貴方には専属のメイドがいるじゃない」

フラン「あ姉ちゃんだつて! ミケは私の猫!」

レミリア「はいはい: 私はお茶するからじゃあね」

と、レミリアは、部屋から出て行つた

フラン「ナデナデ」

ミケ「うにやー♪」

フラン「ふふ: ナデナデ」

ミケ「ふニヤー: ウトウト」

フラン「眠たいの?: ナデナデ」

ミケ「うにや: 眠いにや: 寝てもいいかにや?」

フラン「うん! いいよ! 私の膝貸してあげるよ」

ミケ「うにゃ……」

とミケは猫になりフランの膝の上で丸くなり寝た

ミケ「スウ…… スウ……」

フラン「可愛い……」

ミケ「スウ…… スウ……」

フラン「あの子ほどではないけどね……」

ミケ「スウ…… スウ……」

フラン「あーあ、早く帰って来ないかなあ」

海猫編

海猫「はあ…… なんだろ」

トコトコ

海猫は旧地獄をトボトボと歩いてた

すると目の前に杯を片手で持った星熊が居た

星熊「お、来た来た」

海猫「文さんから聞いたけど相当怖いんだよね」

星熊「あつはつはつは、なあに戦いじゃないよ」

海猫「?じゃ、何?」

星熊「ああ、こいしがな呼んでるんだよ」

海猫「へ？じやあ、なんで星熊宛で手紙が来たの？」

星熊「ああ、あれな実は」

こいし「私がやったの！」

とききなり表れたこいしは海猫の尻尾に乗ってきた

海猫「ちょ！いきなりは… と言わずとついできたの?!」

こいし「うん、そうだよ？」

星熊「あのな、こいしが無意識で私名義で手紙をかいて、お前に送ったんだよ」

海猫「はあ、そういう事ね」

こいし「モフモフしてるー」

海猫「はあ」

星熊「へえ、そんなに藍の尻尾程ではないけどモフモフしてるのか？」

こいし「うん」

星熊「ガシッ」

海猫「ふや?!」

星熊「ふーん」

こいし「星熊ー力強すぎ〜」

星熊「あ、悪いな、あつはつは」

海猫「痛い……ううー……」

こいし「ありやりや……」

海猫「ううー……」

星熊「こりや……駄目だね……おぶって行くか」

と、星熊は軽々海猫を背負い、小石と共に地獄にある館に向かった

海猫はその時気絶しており、記憶がない

館の客間

海猫「……んう？」

こいし「……起きた？」

海猫「……うん……ここは何処？」

こいし「館の客間」

さとり「私のペットが、そのまま○○○しまえば良かったのに」

海猫「え？……なんだって」

こいし「尻尾ギユつとしただけじゃならないでしょ？」

海猫「流石にね……ただ、切り落とされたりしたら……」

燐「じゃ、しちやいませよ♪」

海猫「いやだよ！」

燐「ちえ、じゃあ…」

海猫の背後から星熊が現れて

海猫の尻尾を鷺掴みにした！

海猫「ふにゃ?!」

星熊「弄りがあるなあー、あつはつは」

こいし「猫みたいー」

さとり「…ふふふ」

海猫は、その後尻尾をいじられまくったそうだ…

今後の予定についてパルスィさんと海猫君、お嬢様、アリスと会話

海猫「…で、集められたんだけど」

レミリア「はやくして欲しいんだけど」

作者「あの、話し合いの前にこのミンチ状態どうにかして…」

アリス「はあ、はいはい…」

作者修復中

作者「で、今後どうしていきたいのか話し合います」

海猫「タグにほのぼのってあるけど…」

作者「ぶっちゃけバトルも入れて行きたいんだよねー」

パルスィ「私はこのままでもいいと思うわよ」

レミリア「私も」

アリス「できれば、私は二次元設定を無くして欲しいわね」

作者「アリスの意見は取り入れるけど…パルスィさんが何故今の状態を維持したいのさ?…ほとんどイチャイチャしかしてないのに?」

パルスィ「？単純よ……妬むキャラがないと妬めないからよ」

作者「うん、ものすごく単純でした」

レミリア「で、バトルを入れたいのなら……敵キャラもいないと」

作者「まあ、そこんところは決めてるんだよね」

海猫「へえー、ネタあるじゃん」

作者「いや……きつかけが思いつかないんだよねー」

アリス「なるほどねー」

海猫「それに、僕は風見さんからとか、紫さんからしか話を聞いた事しかないキャラもいるし」

レミリア「まあ、主人公が、会ったこともないキャラがいるなら、まず最初に敵キャラもそいつにして会わせればいいんじゃないの？」

作者「なるほどねえー」

海猫「それは、それでいいんだけど……」

アリス「話作る側からしたら面倒い奴らしか残ってないのよねー」

作者「聞こえる人に、スタンド……ネズミに宇宙人……代理人に紫女……天子に……」

アリス「よく考えたら、ネタになるやつばかりじゃない……」

レミリア「アリス、あんた前に私の事否定したわよね」

海猫「確かにー」

レミリア「あんたもよー!」

パルスィ「あんた達で、盛り上がるのはいいけど… 私もいるのよ」

レミリア「あ、ごめん…」

作者「で、姑まし代表のパルスィさんからしたら話はどうしたらいいと思いますか?」
パルスィ「まずは、イチャイチャを減らすことね… 確かにほのぼの目当てで、読んでくれる人もいるかもしれないけど、流石にほのぼのしすぎるわよ… 時々普通の日常だし… 少しぐらいいは戦闘を入れる事ね… それと文字を1000以上じゃなくて2000以上目指しなさい… さすがに少ないわよ… あと、ストーリー性を作らないとね…」

海猫「作者… 変わった方がいいと思うよ…」

レミリア「同じく…」

アリス「私も同じく… あ、それとちやんと二時設定無くしてよ!」

作者「はいはい… ただ、パルスィさん凄いな…」

パルスィ「え? この世の中にはパラレルワールドというものがあつて今いる私… 別の世界にも私とは違う私がそんざいしているのよ… 紫に頼んでからその人と繋がってるのよ」

作者「なんか……」

海猫「次元が……」

アリス「違うような……」

レミリア「気がする……」

パルスィ「……そう？」

海・ア・レ「……うん」

作者「まあ……頑張るよ」

感情は隠すのが難しい人もいるんだよ

新聞記事

脅威!! 狂う人々!!!

霊夢 「はあ： あのお面ね」

文 「あ、はいそうですね。ただ、それもそうなんです： その影響で： ある人が暴走して：： この文をよく読んでくださいよ」

霊夢 「はあ？： 何々：：： って！ なにかかかってんのよ！」

文 「なんでも、お酒の飲みすぎとか：：」

霊夢 「はあ？：： というか接点ないでしょ！ お面とあいつは！」

文 「いやあ： それがお面の方が： 『その近くを通つて：： なんとなく被つたらそうなつちやつた♪ テヘペロ♪』 だ、そうです。」

霊夢 「：：： 今回は魔理沙に任せようかしら：：」

文 「あ、魔理沙さんなら風邪で寝込んでますよ？」

霊夢 「はあ?! あいつ：：： なら、妖夢は?! 咲夜も！」

文 「妖夢さんなら空いてるようですよー、咲夜さんはメイドの仕事が忙しいので無理

だそうです。」

靈夢「妖夢で、いいわよ!… 全く… あ、そうだ、海猫は!」

文「ああ、あの海猫くん達なら空いてようでしたよ?… ミケちゃんを、愛でてましたよ?」

靈夢「なら、彼奴も連れてきて!」

文「はいはい!」

靈夢「それと、お面に八つ当たりするわよ」

文「貴女、巫女ですよね?」

靈夢「だから何よ?…」

文「いえいえなんでもありません!」

靈夢「私は、お面を八つ当たりしに行くから、妖夢達で二人組どうにかしてよね」

文「あ、はい」

烏天狗 庭師呼び出し

白玉楼

妖夢「あの、私便利屋と間違われてる?」

文「ただ、あの巫女の事ですから…」

妖夢「幽々子様に許可を貰わないと…」

幽々子「いってらっしやいー」

妖夢「早?!とゆうか行っていいんですね！」

幽々子「だってー、妖夢ここ最近なんか強い敵いないかなあーなんてつぶやいていた
じやない」

妖夢「ギク!!」

幽々子「だから気にせずいってらっしやい」

文「んじゃー連れて行きますねー」

妖夢確保！

海猫家

海猫「ナデナデ」

ミケ「ニヤー♪」

海猫「ナデナデ」

ミケ「うにゃー… ウトウト…」

海猫「ナデナデ…」尻尾を振ってる

文「じいー」

妖夢「じいー」

ミケ「スウ… スウ…」

海猫「… スウ… スウ…」

文「なんででしょうね」

妖夢「なんか… 負けた気分がするのは…」

文「まずはこっちの妖怪（リア充）を、殲滅するのが先ですかね」

妖夢「それもそうですね」

文と妖夢は弾幕を発射した… ミケの能力が発動しているのにも気づかずに…

文・妖「きやあ！」ピチューン

海猫「ん？… 妖夢？… 文？… どうしたのさ？」

文「… ふきやく」

妖夢「…」

ミケ「ふにやー… 弾幕が僕ので跳ね返ったんだと思うよ… 海猫」

海猫「ふーん、でもなんで？」

ミケ「えつと、なんとなくやったらそうなっちゃったの」

海猫「それなら仕方ないね、ナデナデ」

ミケ「にゃ♪」

妖夢「… (腹黒)」

文「… (脇巫女とは、また違う腹黒)」

海猫は、ミケを撫でながら妖夢達が倒れている草むらに向かった

海猫「大丈夫？」

妖夢「大丈夫……」

文「ですよ……」

海猫「で、なんで来たの？」

妖夢「その前に……」

文「やつぱり……」

妖夢「休ませて……チーン

海猫「え？なんか妖夢さん……」

文「大丈夫ですよ……半分〇でますから」

海猫「……そう……何ですか……」

少女 休息中

説明中

海猫「で、僕が呼ばれたんだね……ミケはどうする？」

ミケ「行きたい！」

文「まあ、断つても巫女さんが許さないとと思うんですけど」

妖夢「確かに……」

海猫「まあ、行くよ」

次回

だんまくばとる

です！

キョンシー

海猫「…………… えっと…………… あれが邪仙？」

ミケ「…………… なんていうか……………」

妖夢「…………… 薬物中毒者……………」

文「あややや……………」

青娥と宮古は、狂ったように人を襲っていた…………… それもしやべらずに……………

妖夢「…………… あれお面の効果なんですか？」

文「まあ…………… 半分以上は、お酒ですね」

海猫「へ？それじゃあ…………… あの新聞は？」

文「いえいえ!! 本当ですよ!!」

海猫「?どゆこと？」

文「ですから、お酒でべろんべろんによった所にお面の力が、働いてあんな感じになつたんですよ!」

妖夢「え?でも、お面にそんな能力あった？」

分「あや?知らないんですか?お面はいくらでもあるんですよ?ただあの人か面倒く

さがりで喜怒哀楽しか使ってないだけですよ?」

妖夢「へえー、どうでもいい情報ですわね」

文「聞いたの貴女からですよね?」

ミケ「そんなことよりも、早く助けて!!」

ミケは能力で宮古に食べられそうになっている人達を守っていた

妖夢「あ!忘れてた!!」

文「助けに行きますよー」

海猫「一部キョンシー化してる人もいるね...」

文「それはほっとけば治ります!」

海猫「んじゃ: 土の檻にでも閉じ込めておこつと:」

海猫は能力で、土でキョンシー化した人たちを閉じ込めた

ミケは、宮古と

妖夢と文は青蛾と戦っていた

宮古「.....」

ミケ「無表情で襲ってくるのやめて!怖いから!」

宮古「.....」

ミケ「ふにゃー!!」

ミケは海猫に向かってダツシユ

妖夢「ちよ！ミケさん?!」

文「妖夢さん！目の前の敵に集中して！」

青娥「スキアリ：：」

青娥は、妖夢に向かって弾幕を撃ちこんだ

宮古もミケに対して弾幕を打ち込んだ

二人ともいきなりの事で対処できなかつた：：：

文「ふう：： 危ないですね」

妖夢「文さん?：： 助かつた：：」

海猫「危ないね」

ミケ「主：： あノキョンシー怖いよ!」

文は妖夢を、海猫はミケを抱っこして避けていた

青娥「：： もぬこひsasajjavs：：」

宮古「：：：：」

文「あや?：： 何ですかね」

海猫「さあ? 操符『永久輪廻』」

海猫の周りから円を描いた弾幕が出てきて宮古に向かって弾幕が放たれた

宮古「……（狂笑）」

宮古は海猫に不気味な笑みを投げかけるとそこから消えた
文「あややや?! 何処ですか?!」

海猫「はえ?」

ミケ「後ろ!!!」

宮古「……雑魚方……」

海猫「え?」

海猫は宮古の弾幕をもろにくらいピチューン

妖夢「この! 天界剣『七魄忌諱』」

妖夢は青娥に向けてやったが……

青娥「キレイダネエ……ククフ」

妖夢「ビク!」

青娥はいつの間にか妖夢を背後におり、弾幕を放った……

妖夢もピチューン

文「あややや!! こんなにもなるんですかね!」

ミケ「ヤバいにや……」

宮古「コレデオナジ」

青娥「ダヨネ……ククフフフ」

文「ビク……これは……物凄くやばいですね……」

ミケ「にや……護符『完全なる加護』」

ミケと文の周りに見えない壁が出来た

青娥「……??」

宮古「……毒爪『ポイズンレイズ』」

文に向かつてヒット……せずに宮古にヒット!

文「あやや? 当たりませんね」

ミケ「……普通に避けてにや……」

宮古はヒットした衝撃で岩にヒット!そして……ピチューン

文「あや?! ミケさん!! お強いですね!」

ミケ「でも……限界……ボフン(猫になる)」

青娥「……」

文「あやや……ここはブン屋として見せ所ですね」

青娥「邪符『ヤンシヤオグイ』」

文「よつと!……1人だったら周りを気にせず避けれますから! こつちが有利なんで

すよ!」

青娥「…：… ハヤイ…：… ケド…：… コウゲキハ？」

文「…：… それは隙を見てやりますよ！（相手の弾幕に隙が無い！…：… 避けるので背一杯だ…：… このままだと…：…）」

青娥「ニヤリ…：…」

青娥は、攻撃の手を緩めるところか激しくなっていく一方…：… 文もその分避けるのがだんだん難しくなっていく…：…

文「きやあ!!」

とうとう弾幕にヒットた…：… と同時に謎の声がした

??? 「恋符『マスタースパーク』!!」

青娥「?!」ピチューン

魔理沙がやってきたのである

魔理沙「ふうく…：… 危なかつたんだぜ」

文「あやや…：… これのどこが危なかつたんですか…：…」

海猫「…：…」

妖夢「…：…」

ミケ「にゃー!!」

魔理沙「あはは…：… ごめんなんだぜ」

文「それはそうと… 風邪じゃなかったんですか？」

魔理沙「ああ… それは」

永琳「それは、私が治したのよ」

文「あや？やb… 永琳さんが治したんですか？」

永琳「… 今のは聞かなかったことにするわ… 私だつて治すわよ」

魔理沙「そんな事よりこの伸びてる二人は治さなくていいのか？」

永琳「治すわよ…」

するとスキマが開かれ海猫だけ連れて行かれた

魔理沙「紫？」

紫「ええ… そうよ… ちよつとこの主借りるわよ？」

ミケ「にや？」

永琳「病人に無理でもさせるのかしら？」

紫「大丈夫よ、貴方みたいに実験はしないから」

永琳「へえー、覗き魔に言われるなんて心外だわ」

紫「うふふ…」

文「なにやら… 匂いますね」

紫「来たければ来なさい…」

文「そうですか…取材させてもらいますね」

魔理沙「私も行くんだぜ」

紫「いいわよ…」

と言うとスキマが開き魔理沙と文を連れて行った

永琳「それじゃあ…私はこの子の治療と子猫の世話でもするわね」

紫「よろしく…」

紫は隙間の中に消えていった…

なんか心細い宴会...

一同「かんぱーい！」

博麗神社で宴会

天人も地下も山も人も赤い館もなどなど！

皆が楽しく飲み交わすときである！

萃香「文くじゃんじゃん呑むぞー」

文「あ、ハイイ〜」

椛「・・・文さん頑張つて・・・」

星熊「お前はこつちでな☆」

椛「え、遠慮しときます！」ガシッ

星熊「ま、遠慮するなつて！」

椛「は、はい（おわつた・・・私の人生）」

霊夢「ふう・・・騒がしいけどいいわね」

ルーミア「なのだー」

霊夢「あら？ルーミア貴女ここで馬鹿と飲まなくていいの？」

ルーミア「霊夢と一緒にいいのーだー」

霊夢「ふうーんそう： 貴方は食べるほうかしら？」

ルーミア「なのだー」

霊夢「じゃ、一緒に食べてあげるわよ」

ルーミア「やったあ！」

霊夢「喜ぶほどでもないでしょ？」

ルーミア「喜ぶのだー！」

霊夢「ふふ．．」

ルーミア「ニコニコ」

魔理沙「．．． あのかな二人とも何故そんなにくらいんだぜ？」

パチュリー「．．． 珍しく発作がきたのよ」

アリス「．．． 紅茶がいいのだけれども」

魔理沙「あ、そ、そうなのかだぜ」

小悪魔「お薬ですよー」

上海人形「紅茶ー」

パチュリー「ありがと．．」

アリス「ふう．． 落ち着く」

魔理沙「……なんだこれ」

作者「茶番で」ピチューン

てゐ「ギュー！」

ミケ「く、苦しい！」

てゐ「ぎゅー！」

ミケ「苦しい……から……」

てゐ「ギュー」ピチューン

永琳「やりすぎよ」

てゐ「いててて」

ミケ「た、助かったにや」

イナバ「よいしよつと」ミケを抱っこ

ミケ「にや？」

イナバ「ナデナデ」

ミケ「にやー♪（嬉しいけど……なんかに）」

永琳「ふふ……」

レミリア「…… 咲夜」

咲夜「はい、何でしょうか」

レミリア「飲まないのかしら？」

咲夜「いえ、私は：。」

レミリア「飲みなさいよ」

咲夜「いいですか？では：。」

レミリア「ふふ：。ワイン美味しいでしょ？」

咲夜『はい：。いつも以上に美味しいです』

レミリア「貴女いつも自分で注いでばかりだから：。ふふふ」

咲夜「お気遣いありがとうございます」

フラン「お姉ちゃん！」

レミリア「はいはい、カンパイ」

フラン「ぶー！一緒に楽しも！」

レミリア「はいはい：。」

フラン「ニコニコ」

とある空間

そこには尻尾が赤黒い海猫に紫に幽々子がいた

紫「思い出したかしら？」

海猫「……君がとつてたんだね……」

幽々子「はあ……全く紫も面倒くさい事するわよね」

紫「あら？そんなのを手を貸したあなたが悪いのよ？」

幽々子「仕方ないでしょ……急激に死者の霊がいなくなるのだから」

海猫「……皆には言わないんだよね？」

紫「言わないわよ」

海猫「ありがと……」

幽々子「はあ……全くこっちの身にもなつてよね」

海猫「亡き者なら生き物にしてあげるよ？ふふふ……」

幽々子「その存在自体死なすわよ」

紫「ふふ……喧嘩はそのへんにして」

幽々子「はあ……」

海猫「で……これから僕はどうなるの？」

紫「元の場所に戻してあげるわよ」

海猫「そつから、僕は何処に行けばいいのさ」

幽々子「薬屋」

海猫「あの人だね」

紫 「その人に……」
海猫 「……うん、わかったよ」

これが求めてる者ですか？

竹林のとある家

妹紅「……なんでてゐがいるんだ？」

てゐ「……地獄から抜け出したんだうさ」

妹紅「地獄？なんだあのヤブ医者か？それともあのニート姫か？」

てゐ「……どっちもだうさ」

妹紅「はあ？どっちもが狂ってるって事はありえんだろ？」

てゐ「……ありえたんだけうさ……少し話すうさ……」

ある日の診療所

輝夜「ねえーペットー」

ミケ「僕はミケだにや」

輝夜「どっちでもいいわよー……暇よー」

ミケ「姫様が何を言ってるんだにや……何か作ったりしないのかにや??」

輝夜「んー……無いわねー」

ミケ「ガクツ……そうかにや……うーん……料理でもするかにや？」

輝夜 「ん？何か作ってくれるの？」

ミケ 「輝夜さんも一緒に」

輝夜 「ええ！：いやよー」

ミケ 「うーん：：プリンを作ろうとしてたんだけど：：」

輝夜 「?!何作れるの？」

ミケ 「僕はちっちゃいから手伝ってくれるなら：：」

輝夜 「：：ぐぬぬ：：いいわ、手伝ってあげるわよ！その代わりちゃんと美味しい物を作ってよね！」

ミケ 「分かったにや！」

ミケとニート料理中の中、永琳の部屋では：：

永琳 「優曇華ー」

優曇華 「何ですか？師匠」

永琳 「このカラメルソースを輝夜に届けて欲しいのよ」と言い出すと小瓶に入ったカラメルソースを取り出した

優曇華 「自分で行けばいいじゃないですか？」

永琳 「もう少しで新薬が完成しそうなのよ」

優曇華 「はあ：：分かりました」

ところ変わってキッチン

ミケ「どうかにや？できたかにや？」

輝夜「…うまく行かないわよ…大体手伝だけじゃなかったの！」

ミケ「騙したにや♪」

輝夜「ぐぬぬ…美味しいプリンを待ってたのに!!」

ミケ「ちゃんと二つ作ってるにや」

輝夜「何よー…それを早く言いなさいよー」

優曇華「あの一」

輝夜「ん？どうしたの？」

優曇華「このカラメルソースを…」

ミケ「…完成したけど…かけるにや！」

と言うとミケは完成したプリンにカラメルソースをかけた…

この時はミケと優曇華は知らなかった…地獄になる事を…

輝夜「うう…急に腹痛が…」

優曇華「大丈夫ですか?!」

輝夜「プリンは諦めるわ…ミケと優曇華で食べてもいいわよ」

と言いつつ輝夜はダッシュでトイレに直行

輝夜は勿論危険を察知していたのだ……優曇華が持つてくるカラメルソースと言うことは薬であることが十中八九合っているのだから……

ミケ「行つちやつた……食べるかによ？」

優曇華「うーん……姫さま言つてたし……頂きますね♪」

ミケと兎お食事中

ミケ「うーん……なんか薬品……臭いによ」

優曇華「……まさか……師匠！」

と言うと輝夜と永琳が襖を開けて現れた

永琳「これは私が作った……ポワポワする薬よ！」

ミケ「……名前からして嫌な……」

優曇華「……予感……」

輝夜「……いわゆる○○と言つた所ね」

ミケ「にや?!」

優曇華「……うー……ぼーっとし始めたんだけど……」

永琳「うふふ♪……効いてるわね……何処そのメイドさんが欲しがってたのよの」

輝夜「んじゃ私ペットね」

永琳「弟子を苛めるのは……ゾクゾクするわね……」

永琳と輝夜の性癖が判明

優曇華「……ふ……えええ……」

ミケ「……にやや……」

永琳「楽しい♪ウフフ」

輝夜「楽しい♪」

てゐ「……これが私の見たところだろうさ」

妹紅「……なるほどな……」

てゐ「ミケは尻尾とか耳とか噛まれたり撫でられたりとかさされてたし……優曇華

は……言いたくないうさ」

妹紅「言うな」

てゐ「……記憶を無くしたいうさ」

妹紅「それは分かる……」

夜……皆が寝静まり永琳の部屋

海猫「……やあ」

永琳「あら？来たの？」

海猫「まあね……」

永琳 「さてと： 私と一戦交えてくれるのよね？」

海猫 「あれ？ そうなの？」

永琳 「あら、先ずは私の要件を済ませてからね」

海猫 「うん分かったよ」

戦い?そんなものは忘れた!!!

海猫「うー……うー……」

永琳「……私がしでかしたのよね?」

優曇華「はい、師匠」

永琳「そして……紫も……」

紫「ええ……あなたが九割私が一割ね」

優曇華「五十歩百歩です」

紫「うさぎ鍋にしてやろうと言いたい所だけど……合ってるわね……はあ」

海猫「……うー……?……」

優曇華「これ……第三者が見たら大人の女性が少年に色々と教えてあげるみたいな雰

囲気ですよーw」

紫「永琳……もしかして優曇華にも何かした?」

永琳「ええ……少しハイになる薬を」

紫「少し黙つときなさい……」

紫は優曇華をスキマの中に入れた

スキマの中からは悲鳴が聞こえた…

紫「さてと… あとは亡霊さんがくればおっけーね」

永琳「おっけーね」

幽々子「… 何してるのかしら？」

その頃

慧音「誰かが私の噂を… くしゅん！」

チルノ「大丈夫？ 慧音センセー？」

慧音「ああ… 誰かが私の噂をしてるんだよ」

ルーミア「そーなのかー」

慧音「そーなのだー」

大ちゃん・チルノ・ルーミア・慧音「わはー」

何処かの動画で見た？… それはあっている!!!

怒られますよ？

多分大丈夫だ!!!

多分じゃダメですよ… あーあーコメ欄荒れるはー

ヒイ… そこがうれしい

変態だ…

変態じゃない!きち・グシヤ

はいはい: 所変わって...

紫「... ふふ♪... ふふ♪」

永琳「何してるのよ」

紫「ん?何ってミケの頬突っついてるのよ」

幽々子「食べたら美味しそうね♪」

永琳「二人ともどうしたのよ... 私はツツコミ担当じゃないわよ」

幽々子「あらあらー... 貴女だって... ミケとか優曇華とか弄ってた癖に」

永琳「?!見たの?!」

紫「エエ〜リアルタイムでね... ミケが... ひゃっ... とかミヤー... とか声が色つ

ぽかったよねー」

幽々子「優曇華なんて... し、師匠く... ダメですよ... なんてねーw」

永琳「う、五月蠅い!!サツサツと始めて!!」

幽々子「はいはい」

と言うと幽々子は海猫の額に黒い蝶の印をつける

それと同時にいたるところからカラフルな蝶があたりを舞う

紫「幻想的ねー」

永琳「そういえば… 例の妖怪を消し去った時は黒い蝶だったわね」

紫「その魂が消えていなかったのよね…」

永琳「… そうね…」

紫「あれは私の不手際だったわね」

幽々子「そろそろ終わるわよ」

あたりにいた蝶はひらひらと落ちていき… 光の粒子となって消えた…

そして蝶が消え去った時海猫の額にあった黒い蝶の印も消えた…

幽々子「さてと、終わったわよ」

紫「ありがと、後は」

紫は海猫に近づくと首元に謎の印を書き入れた

ミケにも同じものを入れている

永琳「あら？それは…」

紫「石橋を叩いて渡れよ…」

と言うと紫はスキマの中に消えた

幽々子「バイバイ」

幽々子は消えた

永琳「ふふ、なるほどね…」

永琳は不敵に笑い、海猫とミケを布団の上に寝かした